

## 註解

第八百二十二條 年金負債主ノ第二ノ義務ハ年賦額ノ適法ノ辨濟ナリ

法律ハ年金所得者又ハ生命ヲ限度トシテ年金權ヲ設定シタル者ノ如何ニ長命ナリトモ義務者右ノ義務ヲ免カル、ヲ許サス是レ其偶生契約ニ係ルカ故ニシテ義務者甚ク短キ時期ノ後其年賦額ノ義務ヲ免カル、トアル可キニ因リ偶然年金所得者ノ生命豫見外ニ繼續シタル片甚ク長ク義務ヲ負擔スルハ至當ナリトス

此義務タル若シ無期年金ノ事ニ付キ別異ナル法規アラサリセハ敢テ法律ニ掲載セサル可キナリ○蓋シ無期年金ノ義務者ハ年賦額ヲ生スル元金ヲ返還シ以テ年賦額ヲ辨濟スルヲ免カル、ヲ得而シテ如何ナル反對ノ合意アリトモ義務者之レヲ行フヲ得可キモノトス其理由ハ後ニ之レヲ示サン

本條ノ場合ニ於テハ之レニ反シ義務者年金ノ買戻ヲ爲スヲ得ルニハ之レヲ准許スル合意アルヲ要ス

第八百二十三條 年賦額ハ其辨濟ヲ毎月爲ス可キモノト一層長キ時期ニ爲ス可キモノトヲ問ハス日割

ヲ以テ權利者之レヲ獲得スルモノトス  
 然レモ年賦額ヲ前拂ニス可キ場合ニ於テハ其期ニ  
 掛リタル以上ハ一期分ノ全額ヲ支拂フ可キモノト  
 ス

## 註解

第八百二十三條 年賦額ハ年金權ノ民法上ノ果實ニ  
 シテ日割ヲ以テ獲得スル通常ノ規則ニ從フ(參看第  
 五十六條)其多少相ヒ距リタル期限アルモ唯モ雙方  
 ノ便宜ノ爲メ取用シタル辨濟ノ方法ニ過キス○故  
 ニ若シ各年ノ賦額若干ト定メタルモハ之レヲ三百

六十五分シ毎日其一ヲ獲得ス可シ又各月若干ト定  
 メタルモハ月ノ大小平閏ヲ問ハス之レヲ三十分ス  
 可シ○是ヲ以テ年金所得者又ハ生命ヲ以テ限度ト  
 シタル者既ニ其期限ニ死去スルモハ其相續人ハ經  
 過日數ニ應シ年賦額又ハ年賦額ノ部分ヲ得可キ權  
 ヲ有ス

此論決タル其年賦額ヲ各期ノ終ニ於テ支辨シ而シ  
 テ其經過シタル時期ニ適スヘキモノトスル場合ノ  
 爲メナリ是レ通常ノ場合ト看做シ得可キモノトス  
 然レモ本條ニハ例外トシテ年賦額ノ適ス可キ時期

ノ始ニ於テ豫メ之レヲ辨濟ス可キヲ仮定ス此場  
 合ニ於テハ年金所得者其時期ノ始ニ於テ生存スル  
 チ以テ之レニ適ス可キ年賦額ヲ舉ク獲得スルニ足  
 ルモノトス○其理由タル概テ年金ノ債主前期間義  
 務ヲ締結シ之レヲ辨償スルカ爲メ新時期ヲ待ツコ  
 アル可キニ在リ

第八百二十四條 義務者年賦額ノ辨濟ヲ怠ルト雖モ  
 權利者ヨリ年金設定契約ヲ解除ス可キ權利ヲ約定  
 シ置キタル場合ヲ除クノ外之カ爲メ權利者ヨリ該  
 契約ノ解除ヲ請求スルコトヲ許サ、ルモノニシテ權

利者ハ唯義務者ノ財産中年賦額ノ支拂ヲ確保スル  
 ニ足ル部分ヲ差押ヘ之ヲ賣却セシメ其賣買ヨリ生  
 スル元資ヲ益用シ其收入ヲ以テ右年賦額ヲ收受ス  
 可シ但シ他ノ權利者ヨリ相競フキハ格別ナリトス

## 註解

第八百二十四條 今ヤ前述ノ場合即チ義務者其義務  
 チ執行セサルカ爲メ普通法ヲ適用シテ契約ノ解除  
 ヲ爲ス可シト信スルコトアル可キ場合ヲ見ントス  
 右解除ヲ爲スニ付テハ却テ權利者ニ於テ其旨ヲ約  
 權セシコトヲ要ス

實ニ公平ノ點ニ於テハ既ニ若干時日間年金消滅ノ利益アル偶事ヲ以テ之レヲ拂フ可キ任ヲ負擔セシ義務者カ成規ニ適シテ年賦額ヲ拂ヒ得サルニ因リ爾後右利益ノ命運ヲ失フ者ト爲スコトヲ拒ム可シ○本條ノ場合ト義務者其約束セシ抵保ヲ供スルコトヲ怠リ又ハ既ニ供セシ抵保ヲ減少セシ場合トテ比スルニ本條ノ場合ニ於ケル義務者ハ一層忍ス可キモノナリ第一ノ場合ニ於テハ義務者現ニ其供給スルノ權内ニアリシ所ノ抵保ヲ約スルヲ要セシニ過キス而シテ年賦額ヲ拂フ可キ際ニ其拂ノ困難ヲ來ス

ス可キ不注意ヲ免カレナリ第二ノ場合ニ於テハ義務者ハ權利者ニ有害ナル有的ノ所爲ヲ爲セシモノニシテ此所爲ハ無的ノ所爲即チ懈怠ヲ爲セシトヨリモ一層懲罰ス可キモノナリ何トナレハ其懈怠ヲ避クルハ甚ク容易ナレハナリ然レモ豫メ權利者ノ權利ニ注意ヲ加ヘスンハアル可ラス故ニ本條ニハ左ノ如キ注意ヲ爲シタリ即チ權利者ニ於テハ義務者ノ財産ノ一部ヲ賣却セシムルト是レナリ而シテ其賣却ス可キ部分ハ之レヨリ獲得スル資本ヲ以テ有利息貸借ヲ設ケ以テ年金ノ

拂ヲ確ムルニ充分ナルモノタルヲ要トス  
 法文ニハ佛法ニ掲クルカ如ク權利者ハ義務者ノ總  
 財産ヲ差押ユ可シト云ハサルヲ注視ス可シ即チ  
 權利者ハ年賦額ノ支拂ヲ確ムルニ充分ナル高チ差  
 押ユルニ過キス○義務者ノ財産ノ賣却アルハ當然  
 ノヲナリ何トナレハ原則上權利者ハ義務者ノ財産  
 ヲ以テ直チニ辨濟ノ爲メニ自己ニ屬セシムルヲ  
 得サレハナリ○又其賣却シテ得タル金額ヲ以テ年  
 金ノ權利者ニ年賦額ヲ拂フカ爲メ之レヲ第三ノ人  
 ノ掌中ニ於テ使用ス可ラス何トナレハ是レ最初ノ

義務者及ヒ其承權人殊更其權利者等ニ對シ他日年  
 金所得者ノ死去ニ因テ獲得スルコアル可キ資本ノ  
 利益ヲ奪取スルモノナレハナリ此資本ハ貸貸年金  
 又ハ其他利益ヲ生スル方法ニ使用ス可シ然ル後チ  
 權利者ノ死去スルキハ右ノ資本ハ義務者又ハ其權  
 利者等ニ復歸ス可シ  
 又法文ニ義務者若シ他ノ權利者ヲ有シ而シテ義務  
 者ノ財産ヲ以テ總權利者ニ辨濟スルニ充分ナラサ  
 ル片ハ年金所得者ハ右ノ權利者等ノ如ク割合上ノ  
 減少ヲ受ク可シト實ニ年金所得者ニ先取特權ヲ附

與スルノ理由ナカル可シ但シ書入質又ハ動産質アル片ハ格別ナリトス  
 年賦額ノ辨濟ヲ缺キタルカ爲メ解除ヲ拒絕スルモ其拒絕ハ有償名義ヲ以テ設定シタル年金ニ限ル可キトハ是レ法文ニ陳述セサル所ナリ然レトモ佛國ニ於テハ我法文ニ類似スル第一千九百七十八條ノ條例ハ無償名義ヲ以テ設定シタル畢生間ノ年金ニ適用セサルモノト決定スルモノアリ何トナルニ其論者曰ク此ノ如キ年金ハ偶生ノ性質ヲ有セザレハナリト然リト雖トモ吾人ニ於テハ無償名義ニ於ケル

年金モ其他ノ名義ニ於ケル年金ノ如ク偶生ノ性質ヲ有スルヲ證明セリ又前述ノ決定ヲ爲セシ佛國ノ論者ハ其法文ニ於テ年金所得者元資ヲ取戻ス又ハ其所得者自己ヨリ移轉セシ不動産ヲ取戻スヲ拒ミタリトノトニ基因シタリ然レトモ此論據ハ非難ヲ受クルヲナキモノニ非ス何トナレハ移轉ヲ無償ニ爲セシモノトスルモ亦他ノ語ヲ用ヰサル可ケレハナリ又論者ノ曰ク畢生間ノ年金ヲ負擔シタル受贈者ニシテ其義務ヲ盡サ、ル者ハ有償名義ヲ以テ約セシ者ニ比シテ左程保護ヲ加フルニ及サル

モノナリ蓋シ其受收ヒシ元資ハ其承諾セシ負擔高  
 ヨリモ常ニ著シク多額ナレハナリト然レトモ此理  
 由モ尙ホ弱キモノナリ何トナレハ贈與者ハ受贈者  
 ナ惠マント欲セシ者ナレハ受贈者ニ對シテハ唯其  
 畢生間ノ年金ヲ支拂ハサル旨ヲ難ス可キニ止マレ  
 ハナリ然ラハ則チ該年金ノ支拂ヲ保確スル爲メニ  
 ハ法律指示スル所ノ處置ヲ施スヲ以テ足レリトス  
 卽チ解除ヲ以テ必要ト爲サ、ルナリ  
 其他無償名義ヲ以テ設定シタル畢生間ノ年金ノ場  
 合ニ箇アリテ其場合ニ於テハ年賦額ノ支拂ナキモ

解除ヲ生セサル可キモノナリ○是レ他ナシ或人ニ  
 畢生間ノ年金ヲ直接ニ附與シ又ハ之レヲ遺囑セシ  
 場合ナリ○此ノ如キ場合ニ於テハ年賦額ヲ拂ハサ  
 ルトニ關シテ過失アル者ハ贈與者又ハ遺囑者ノ相  
 續人ナリ而シテ契約ノ解除ヲ爲スハ爲メニ恩惠  
 ヲ破リ以テ年金所得者ノ掌中ヘハ何等ノモノヲモ  
 戻サスシテ唯此所得者ヲ妨害スルニ過キサル可ケ  
 レハナリ○此場合ニ於テモ亦年賦額支拂ニ充分ナ  
 ル元資ノ臨時預ケヲ爲シ以テ有効ニ年金所得者ノ  
 利益保護ニ注意ス可キナリ

第八百二十五條 或人ノ生命ヲ以テ年金ノ繼續期限ニ定メアル場合ニ其人カ年賦額支拂期日ニ生存セシ證據ヲ義務者ヘ供セサルキハ義務者其年賦額ノ辨濟ヲ拒絕スルコトヲ得可シ

生存ノ證書ハ其人ノ現ニ居住スル地ノ邑長ヨリ之レヲ渡ス可シ

註解

第八百二十五條 年賦額ノ支拂ハ年金所得者ノ生命又ハ年金繼續ノ限度ニ定メタル人ノ生命ト共ニ消滅ス可キモノナレハ毎時支拂フ可キ金額ハ此人々

ノ存命ノ條件ニ從フテ實行ス可キニ過キス然ラハ則チ年金所得者ハ原告人タルヲ以テ自己ノ權利ノ條件ノ成就シタルヤ否ノ證據ヲ供セスンハアル可ラス

此證據ヲ舉示スルニ生存證書ニ基因ス可シ佛國ニ於テハ公證人ニ於テ此等ノ證書ヲ交附ス○日本ニ於テハ公證人ノ設定ナシ而シテ假令ヒ公證人ヲ設定シタリモ邑長ニ於テ之レヲ交附スルヲ良シトス蓋シ邑長ニ於テハ無償ニ之レヲ交附ス可ケレハナリ



該邑長トハ年金所得者ノ本住所ノ地ノ者ヲ云フニ  
非スシテ其寓居ノ地ノ者ヲ云フナリ  
邑長ニ於テ右ノ證據ヲ要スルキハ本人ニ知ラレタ  
ル證人二名ニ因テ其證ヲ立テシム可シ

### 第三節 畢生間ノ年金ノ消滅

第八百二十六條 畢生間ノ年金ハ第八百十八條第八  
百二十一條及ヒ第八百二十四條ニ豫定シタル解除  
ニ因ル消滅ノ場合及ヒ普通法ニ許容シタル契約ノ  
廢棄又ハ廢止ノ原由ニ因テ消滅スルノ外尙ホ年金  
權ノ限度ニ定メタル人カ死去シタルキハ其死去ノ

原由ノ如何ヲ問ハス其死去ニ因テ消滅スルモノト  
ス但シ此規則ハ第八百十八條ノ適用ヲ妨ケス又義  
務者ノ責メニ歸ス可キ故殺又ハ過誤殺ニ付キ次條  
ニ規定シタルモノハ格別ナリトス  
又畢生間ノ年金ハ隨意ノ買戻シ、更改、合意上ノ釋放、  
混同及ヒ期滿免除ニ因リ消滅スルモノトス但シ其  
期滿免除ハ年金設定ノキヨリ又ハ年賦額最終ノ支  
拂ノキヨリ之レヲ起算ス可シ  
然レモ第八百十九條ニ循ヒ畢生間ノ年金ヲ他へ讓  
渡ス可ラス又ハ他ヨリ之レヲ差押ユ可ラサルモノ

ト合意上定メ置キタルキハ其年金ニ付テハ期滿免  
除ヲ許サ、ルモノトス  
何レノ場合ニ於テモ年賦額ハ一期分ツ、其支拂期  
限後五ヶ年ニ因テ期滿免除スルモノトス

## 註解

第八百二十六條 佛蘭西法典ニ於テハ畢生間ノ年金  
契約ノ解除ノ外尙ホ其消滅ニ關スル條例ハ唯一箇  
アルニ過キス是レ千九百八十二條ノ條例ニシテ此  
條例ニハ畢生間ノ年金ハ其所得者ノ准死ニ因テ消  
滅セスト明言セリ○然レトモ此條例ハ千八百五十

四年ニ准死ヲ廢シタルヨリ無用ニ歸シタルナリ  
其他畢生間ノ年金消滅ノ原由ハ之レカ説明ヲ爲ス  
ヲ必要トス可シ其故何トナルニ義務消滅ノ諸般ノ  
方法ハ總テ皆ナ畢生間ノ年金消滅ノ方法ニ適用ス  
ルモノニ非サルノミナラス年金權消滅ノ特別原由  
タル所得者ノ死去ハ或ル場合ニ於テ困難ヲ提出ス  
ルモノナレハナリ  
法文ニハ年金ノ性質上自カラ初メノ二節中ニ顯出  
セシムルニ至ル所ノ解除ノ諸原由ヲ追想シタリ  
但シ法文ハ唯普通法ニ照循シタル廢棄及ヒ廢止

諸原由ヲ記載ス故ニ承諾ノ瑕疵及ヒ尋常ノ無能力ハ茲ニ吾人ノ論述ニ從事スル場合ニ於テモ其他ノ場合ニ於ケルカ如ク無効又ハ廢棄ノ訴權ヲ生スルモノトス又權利者ヲ欺ヒテ爲シタル畢生間ノ年金設定ハ第三百六十條以下ニ從ヒ廢止ノ訴權ヲ生スルモノナリ

辨濟ハ畢生間ノ年金ヲ消滅セサルヲ以テ原則トス蓋シ義務者ハ元資ノ返還ニ因テ年金買戻ヲ實行スルヲ許容セラレハナリ(第八百二十二條)○而シテ法律上之レヲ義務者ニ許サ、ルモノハ是レ蓋

シ年金契約ノ遵守ニ背反スレハナリ然レモ其契約自ラ義務者ニ之ヲ許スヲ得ルハ双方ニテ其買戻ノヲ承諾シタリトノ條件アルルヲ云フ是レ即チ隨意ノ買戻ナリ

又更改及ヒ合意上ノ釋放タル法律上禁スルヲ得サルハ勿論尙ホ妨クルヲモ得サル義務ニ關シタル任意消滅ノ原由ニシテ只是等ノ原由ヲ記載スルヲ以テ足レリトス

或ル一人ニ於テ權利者義務者二個ノ資格ヲ并有シタルヨリ生ス可キ混同ニ至リテハ爰ニテモ尙ホ他

ノ義務ノ場合ニ等シク固ヨリ年金義務ヲ消滅ス可  
 キ効力ヲ生スルモノニシテ若シ年金ノ所得者其義  
 務者ノ財産ヲ相續シタルカ(右ニ反對ノ場合ハ然ラ  
 ス)又ハ第三ノ人權利者ト義務者トノ財産ヲ相續シ  
 タルハ混同ヲ生ス可キナリ  
 又他ノ義務消滅ノ一原由ニシテ混同ト相ヒ并ンテ  
 存スルモノアリ義務ノ相殺是レナリト雖モ爰ニ生  
 ス可キモノコアラス○例ヘハ年金ノ義務者年金所  
 得者ニ對シ其年金ノ元金ニ等シキカ又ハ之レヲ超  
 過シタル金額又ハ價額ノ權利者ト爲リタリト假想

セシコ右權利者ハ年金所得者ノ自己ニ對スルノ義  
 務ト年金ノ義務トヲ相殺シテ其年賦額仕拂ノ義務  
 ヲ免ル、ト能ハス是レ他ナシ右ノ事タル年金ニ關  
 シタル強令ノ買戻タル可キモノニシテ右買戻ノ  
 タル前己ニ説キタルカ如ク年金所得者ノ任意ニ出  
 テタル時ニアラサレハ約スルヲ得サルモノナルヲ  
 以テナリ

且ツ期滿免除ハ年賦額ニ於ケルト等シク年金所得  
 ノ權利自ラニ適用シ得可キモノニシテ只其期限ニ  
 至リテハ右二個ノ期滿免除ニ於テ同シカラサルノ

差異アルノミ即チ年金所得ノ權利自ラノ爲メニハ  
 普通期限ニシテ(固ヨリ三十年)只其期限ノ五ヶ年ナ  
 ルハ年賦額ニ關スル時ニ限ル可キナリ  
 右二個期滿免除ノ起算點ニ至リテモ亦同一ナラス  
 即チ年金所得權利ニ關スル期滿免除ノ起算點ハ年  
 金ノ設定アリタル片又ハ年賦額仕拂ヲ以テ年金所  
 得權利ノ認知アリタル片ニシテ年賦額ニ關スル期  
 滿免除ノ起算點ハ其所得期限ノ經過シタル片ナ  
 ル可キナリ  
 年金所得ノ權利自ラニ關シタル期滿免除ニ至リテ

ハ殊ニ之レヲ以テ義務消滅ノ直接方法ト見做サス  
 シテ義務ノ消滅ニ關スル正當ナル推測ト見做スニ  
 於テハ其適用上尙ホ疑ヒアル可シ是レ即チ草案ニ  
 於テハ右等ノ事ヲ以テ義務消滅ノ直接方法ト爲ス  
 ノ理論ヲ採用シタル所以ナリ  
 是ノ如ク論スレハ人或ハ之レヲ駁シテ義務者ハ年  
 金ノ元金ノ償還ヲ強ヒラル、ヲ得サルハ勿論或ハ  
 又義務者ヨリ權利者ニ之ヲ強ルヲ能ハサルモノナ  
 レハ他ノ義務ニ關スル場合ト等シク辨濟ヲ以テ年  
 金義務ヲ免レタリト推測スルヲ得スト論スル者ア

然レモ又右ノ駁論ニ答フル敢テ難カラサル所ニシテ畢生間ノ年金ハ年金所得者ノ死去ヲ外ニシテ尙ホ他ノ許多ノ方法ニ依リテ消滅ス可キコトハ己ニ見タル所ナリ是レニ由リテ之レヲ見レハ則チ假令ヒ己上ノ消滅方法ハ多少例外ニ屬スルモノナリト雖モ爰ニ論スル點ニ付テハ別ニ重要アラサルモノニシテ若シ年金所得者ヨリ年賦額ノ支拂ヲ請求セシテ三十年ヲ經過セシキハ常ニ消滅ニ關スル正當理由中ノ一アルモノト想像スルヲ得可キナリ○生

存證書ヲ以テ權利者ノ存在ヲ證スルニ於テハ其死去ヲ推測セサルハ固ヨリニシテ又年金義務ニ關シテハ合意上ノ釋放アリタルコトモ推測スルコトナシ何トナレハ彼ノ年金ノコトタル恩惠所爲ニシテ恩惠所爲ハ推測ヲ以テ其消滅ヲ定ムルヲ得サルモノナレハナリ然レモ右ニ關シテ任意上ノ買戻アリタルコトヲ推測スルヲ得可シ

又年賦額ノ期滿免除ニ至リテハ當然其支拂アリタリトノ推測ニ基キテ定ムルコトヲ得可シ何トナレハ年賦額ハ只ニ支拂ヲ可キモノナルノミナラス尙ホ

要求シ得可キモノニシテ年金ノ所得者之レヲ要求  
セスシテ五ヶ年ヲ經過スルカ如キコアル可ラサル  
モノナルヲ以テナリ

彼ノ畢生間ノ年金讓渡ノ禁制ヨリ當然右年金ノ期  
滿免除ヲ以テ免ル可ラサルコトヲ生ス可シトノコトハ  
第八百十九條ヲ説クニ當リテ已ニ業ニ論シタル所  
ニシテ即チ右ノ事タル讓渡ヨリ生スル當然ニシテ  
且ツ強令ノ結果タル可シ何トナレハ畢生間ノ年金  
ニ關シテ讓渡ノ禁制ヲ約權スルハ其目的年金所得  
者ノ生計方法ヲ確實ナラシメ年金所得者ヲシテ其

不注意、其柔弱又ハ浪費ノ故ヲ以テ年金權ヲ毀滅セ  
シノサルニ在ルヲ以テナリ故ニ其第一ノ結果ハ年  
金所得者其義務者ヨリ元金ノ償還ヲ受クルヲ得ス  
或ハ又之レト義務更改又ハ義務釋放ノ合意ヲ爲ス  
ヲ得サルニ在リ而シテ右ノ事タル合意ニ依リテ年  
金所得者ノ爲メ作爲シタル特別無能力ノ一種ニシ  
テ其結果タル年金所得者期滿免除ヲ以テ其年金所  
得權ヲ失フヲ得サルハ猶ホ通常ノ無能力者カ期滿  
免除ヲ以テ其權利ヲ失フヲ得サルカ如シトノコト  
即チ是レナリ且ツ受クルヲ禁シタル償還ヲ受ケタ

リト推測スルハ實ニ爲シ得サルノコトタルヲ以テナ  
 リ然レモ年賦額ニ至リテハ常ニ他ニ讓渡シ又他ヨリ  
 之レヲ差押ユルヲ得キモノニシテ又(第八百十九  
 條)他ノ場合ト等シク期滿免除ニ依リテ免ル、ヲ得  
 可キナリ  
 又年金ノ名義人ノ死去モ消滅ノ方法トシテ論ス可  
 キモノナリ○名義人トハ年金所得者又ハ年金期限  
 ノ限度ト定メタル第三ノ人ヲ謂フ  
 本條第八百二十六條ニ據ルニ死去ノ原因ハ之レヲ

考察セサルヲ原則トス但シ名義人嘗テ疾病ニ罹リ  
 之レカ爲メ年金設定ノ契約ヲ結ヒタルヨリ三十日  
 以内ニ死去シタル場合ニ付キ既ニ第八百十八條ニ  
 記スル所及ヒ次條ニ掲載スル例外ハ此限ニ在ラス  
 故ニ名義人設定契約ノ翌日禍害又ハ犯罪ノ犠牲ト  
 ナリ死去シタルハ其年金消滅シ死者ノ相續人ノ  
 爲メニ賠償ヲ與フルニ及ハサルモノトス又決闘若  
 クハ刑事ノ宣告或ハ自殺ニ因リ死去シタルモ同  
 様ナリ此終リノ場合タル生命保險(次節ヲ看ル可シ)  
 ニ關シ考察スルコト甚タ重要ナルモノニシテ此際ニ



於テハ年金權滅失ス而シテ此三ノ場合ニ於テハ  
死者自己ノ過失ニ因リテ死去シタルカ故ニ其相續  
人ニ賠償ヲ與フ可キノ議論起ルコトナカル可キヤ殊  
ニ明カナリ

第八百二十七條 年金所得者ノ死去ハ其義務者ノ責

ニ歸ス可キ不正當ノ原由ニ出テタルモノナル場合  
ニ於テ其年金ハ有償名義又ハ贈與若クハ贈遺ノ負  
任トシテ設定セシモノナルキハ其年金設定契約又  
ハ其恩惠所爲ヲ解除シテ年金義務者ハ其得タル財  
産ヲ返還ス可シ但シ義務者ヨリ支辨セシ年賦額ハ

毫モ取戻スコトヲ得ス

若シ又其年金ハ直接ノ贈與又ハ贈遺ニ出テタルモ  
ノナルキハ年金所得者ノ多分生存シタルモノト裁  
判所ニ於テ定ムル期限間死者ノ關係人ノ爲メ引續  
テ年賦額ヲ給ス可シ

註解

第八百二十七條 畢生間年金ノ負債主其權利者ノ生

命ヲ滅縮シ以テ其畢生間ノ年金若クハ養料ノ辨濟  
ヲ免カレンコトヲ希求スルコト歐洲ニ於テ前例ナシト  
セサル所ナリ

若シ其所爲發覺スルキハ刑事ノ責罰ヲ受クルノ外  
 其罪之カ利益トナルヲ能ハサルヤ明カナリ○然レ  
 此際ニ於テハ最早名義人ノ生命ヲ以テ年賦金辨  
 濟ノ限度ト爲スヲ能ハサルカ故ニ被害者ノ相續人  
 ノ爲メ專斷ニ失セサル年金ノ支拂期限ヲ定ムルヲ  
 少シク困難ナリトス

本案ニ此點ヲ規定セルハ至當ト謂フ可シ○又本案  
 ハ同時ニ犯罪ノ外他ノ場合ヲ規定セリ實ニ義務者  
 故殺犯タルニ非ラサルモ猶ホ年金ノ名義人ノ死去  
 ニ付キ責ニ任セサル可カラサル場合アリ○唯モ死

去ノ原因正當ナラス而シテ之ニ其責ヲ歸スヘキヲ以  
 テ足レリトス

然レハ正當防禦ニ出テ又ハ正當官廳若クハ法律ノ  
 命令ニ因リ名義人ヲ死ニ致シタルハ其責ニ任ス  
 ヘキニ非ラサルナリ

又其死去之カ過失トシテ其責ニ任スヘキモノニ非  
 ラサルハ責任ヲ負フヲナシ例ヘハ精神錯亂シ又  
 ハ抗拒ス可カラサルカニ因リ名義人ヲ死ニ致シタ  
 ルハ如キ是レナリ

然レハ決闘又ハ争闘ニ因リ殺害ノ意思ナクシテ死

ニ致シタルハ之ニ其死去ノ責ヲ歸スヘク其責任ヲ負ハシムヘシ加之ス本條ノ法文ハ意義廣クシテ過誤殺害ヲ包含スルニ定ルヘキナリ蓋シ此場合ニ於テ負債主刑罰ヲ受ケサルモ其過失之カ利益トナラサルハ當然ナリ

又被害者ノ相續人ノ權利ヲ如何ニ規定ス可キヤノ問題アリ○草案ハ之レニ付キ一ノ區別ヲ爲シタリ

若シ其年金有償名義ノ獲得ノ對價又ハ義務免脫ノ條件ナリシハ犯人ノ民法上ノ罰及ヒ被害者ノ親族ノ賠償ハ有償又ハ無償契約ノ解除ニ從テ受取リ

タル價格ノ返還タル可シ而シテ本法ハ一層輕キ場合ニ付キ第八百二十一條ニ定メタルカ如ク「辨濟シタル年賦額ノ何等ノ部分ヲモ取戻ス」能ハサル旨ヲ附記シタリ

然レモ直接ニ贈與又ハ贈遺シタル畢生間ノ年金ニ係リ(年金設定者又ハ其相續人タル)義務者毫モ受取リタル所ナキハ解除ヲ以テ之レヲ罰スルヲ能ハサルヤ明カナリ

故ニ法律ハ名義人ノ存命ノ最長期トシテ裁判所ヨリ定ム可キ時間中犯人ヲシテ年金ヲ拂フノ義務ヲ

負ハシム裁判所ハ其年齡、其健康之ヲ畧言スレハ長  
命ノ運賦ヲ參酌ス可シ

第三款 陸上保險

アウシユラシス テレストル

第一節 總則

抑モ保險ノ事タル陸上ト海上トヲ間ハス立法上之  
ヲ規定スルニ於テノ最モ困難ナルモノ、一ナリト  
ス

歐洲諸邦ノ大半ニ於テハ海上保險ニ付テ法律アル  
ノミナリ蓋シ海上保險法ハ屢々海上ノ災害アリシ  
ヲ以テ夙トニ其必要ナルヲ覺知シタリ  
佛蘭西ニ於テハ既ニ路易第十四世ノ時有名ナル海  
上命令(千六百八十一年)ヲ以テ頗フル精細ニ海上保

險ヲ規定シタリ○商法ニ於テハ殆ント其條規ヲ舉  
 テ之ヲ補正取用シタリ  
 陸上保險ハ爾後案出シタルモノナリ○最先ニ之ヲ  
 實行シタルモノハ英吉利ニシテ現時其最モ普チク  
 行ハルモノモ亦タ英吉利ナリ  
 然レモ佛國ニ於テハ當初却テ斯クノ如ク効力ノ偶  
 然ニ關スル合意ノ適法ナルヲ訝リ其性質賭博ニ類  
 似スト稱シタリ然レモ之ヲ以テ賭博ト同一視スル  
 ハ其當チ得タルモノニ非サルナリ蓋シ賭博ニ付テ  
 ハ賭戯ニ於ケルト同シク約シタル所ノ價格唯一ニ

シテ偶然ニ依リ之ヲ得ル者ノ何人ナルカ之ヲ失フ  
 者ノ何人ナルカ即チ之ヲ與フル者ノ何人ナルカ之  
 チ受クル者ノ何人ナルカヲ決シ而シテ之ヲ受クル者  
 ハ正當ノ原因ナクシテ之ヲ受クルモノナリ何トナ  
 レハ之ヲ受クル者ハ毫モ對手ニ價額ヲ供スルコトナ  
 ク而シテ此對手ハ之ニ贈與ヲ爲スノ意思アラサルモ  
 ノナレハナリ(是レ第一節ニ於テ既ニ説明シタリシ  
 所ナリ)之ニ反シ保險ニ付テハ(最モ單簡ニシテ且ツ  
 最モ常用セルモノトシテ定料保險ヲ例トセンニ)被  
 保人ハ定額ヲ供シ之ニ依テ其安全ヲ買フモノナリ

詳言スレハ双方ノ豫見ノ如ク發生スルコトアルヘキ損害ヲ賠補セラル、ノ權利ヲ買フモノナリ○故ニ若シ災害ノ生セサルキタリトモ被保人原因ナクシテ定料ヲ與ヘタリト云フハ失當ナリ此安全ノ誠實ノモノタルコトヲ證スルモノハ例スルニ火災保險附ノ家ナレハ所有者之レヲ書入質トシ金額ヲ借用スルニ方リ其家ノ保險ナキトニ比スレハ一層容易ニシテ且ツ一層利益アル條件ヲ得可キコト是ナリ尙ホ保險ト博戯及ヒ賭事トノ異ナレル所ハ被保人ハ其保險ニ因テ決シテ利得セサルコトヲ云フ即チ被

保人ハ災害ヨリ生ス可キ未來ノ損失ノ賠償ヲ受クルニ過キス○又保險人ハ後文陳述ス可キカ如ク相互ノ保險ニ付テハ毫モ利得セズ然レトモ定料保險ニ關シテ利得スルコトアル可ク殊更或ル時期内ニ數多ノ被保人ヨリ夥多ノ定料ヲ受取り而シテ賠補ス可キ災害少々ナルキハ屢々保險人ノ利得スルモノナリ○吾人ハ第八百二十九條ニ至リテ保險ノ正當ナルコトヲ論シ殊ニ相互ノ保險ニ付テハ之レヲ異議シ得サルコトヲ認知セシメ且ツ定料保險ハ一層體ニ其目的ヲ達センカ爲メノ種々ノ方法ニ因テ相互ノ

保險ヲ補足シ之レニ代ラントスルモノナルヲ證  
明ス可シ

第八百二十八條 陸上保險ハ火災、水災、收穫若クハ動  
物ノ滅失又ハ其他合意中ニ特定シタル災害ヨリ財  
産ニ及ホスヲアルヘキ一切ノ損害ニ對シ約スルヲ  
得ヘキモノトス

「生命保險」ト稱スルモノ即チ死去ニ對スル保險モ亦  
エツシニランス、シユル、ラ、ビー  
タ其死去ノ豫定シタル原由又ハ其死去ノ時期如何  
ヲ問ハス陸上保險ト看做スヘシ  
航海ノ危險即チ「海上ノ運賦」ニ對スル保險ハ海上商

法ノ支配ヲ受ク可シ

註解

第八百二十八條 本條ニハ種々ノ陸上保險ノ列記ヲ  
爲シタリ而シテ其列記ハ制限シタルモノニアラス  
シテ唯、其事例ヲ擧ケタルモノナリ而シテ陸上保險  
ハ日本ニ未タ盛大ナラサルニ因リ吾人ハ日本ニ行  
ハル、所ノ保險ヲ指示セスシテ歐洲ニ最モ行ハル  
、保險ヲ指示スルニ止マル可シ  
日本ニ於テハ漸ク火災ニ對スル保險ノ設定アリト  
雖モ尙ホ是レ外國人間ニ存スルニ過キスシテ石造



ノ建物若クハ市中ニ遠隔シタル建物ニ保險ヲ設定セシ而已○海上保險ハ多少信用ヲ有スルカ如シ加之ス日本ニ於テハ近頃此保險ノ爲メニ會社ヲ設定セリ

抑モ需用ニ先タツテ法律ヲ制定スルハ是レ慣習ニ適セサルモノニシテ法律ハ其需用ヲ満足セシムルニ止マルモノト雖モ茲ニハ需用ニ先タツテ法律ヲ制定スルヲ要ス何トナレハ日本ニ於テハ法律ノ條例ノ虧缺スルモノナレハ或ハ右ノ虧缺ハ保險ヲ企テ人民之レヲ希望スルヲ妨クルノミナラス人民ヲ

シテ保險ノ企テヲ避クルニ至ラシムレハナリ而シテ今其保險ヲ組成スルコトアルモ相互ニ於テ其何タルヤヲ知ラサルノ恐レアル可シ

海上保險ハ商法ニ依テ規定ス可シ何トナレハ該保險ハ保險人ノ方ヨリ見ルモ被保人ノ方ヨリ見ルモ常ニ商業ノ性質ヲ有スルモノナレハナリ

扱テ茲ニハ唯陸上保險即チ陸上ニ生スル災害ニ對スル保險ノ問題ヲ發生スルニ過キス而シテ其保險ノ主タルモノハ第一 火災ニ對スル保險ナリ抑モ此保險ノ目的ハ原則上火災原由ノ何タルヲ問ハス

凡テ其保險シタル物件ノ火災ニ罹リタルヨリ生スル損失ニ付キ被保人ニ賠償ヲ拂フニ在ルコトハ後文ニ至リテ説明ス可シ而シテ其火災ノ原由トハ第三ノ人ノ不注意ノ如キ意外ノ原由又ハ天火ノ如キ抗拒ス可ラサル力、其他隣家ヨリ火ノ移リタル片若クハ他人ノ惡意或ハ被保人又ハ其僕婢ノ不注意ノ如シ但シ被保人ノ方ニ重大ナル過失アル片又ハ保險人ノ明瞭ニ例外ト定メタル不注意例ヘハ建物ノ内ニ充分乾涸セサル秣ヲ貯ヘ之レカ爲メ自然燒失シタル場合ノ如キハ別段ナリトス

第二 洪水ニ對スル保險○此保險ノ適用ハ前述ノ火災保險ノ適用ヨリモ少ナカル可シ何トナレハ土地ハ悉ク皆ナ河水ノ溢出又ハ堤防ノ毀壞ノ爲メ水災ヲ蒙ムルコトナル可ケレハナリ

第三 收穫又ハ動物ノ滅失○收穫ノ滅失ハ天象上ノ災害即チ雹、凍冰、早魃ヨリ生シ動物ノ滅失ハ獸疫等ヨリ生スルコトアル可シ

第四 其他財産ニ及ホスコトアル可キ損害ハ嵐地震、謀反又ハ内亂ヨリ生スルコトアリ

又家屋若クハ土地ノ賃借主ノ缺ケタル場合ニ對シ

テ保險ヲ爲スコトヲ得可シ何トナレハ是レ其所有者  
自ラ住居モセス尙ホ耕作モセサル所有財産ヲ貸貸  
シ得サルキハ即チ自己ノ財産ニ損害ヲ受クルモノ  
ナレハナリ

然レモ義務者ノ無資力ニ對シ又ハ其商事分散若ク  
ハ分散ニ對シテ保險スルコトヲ得ルヤ否ニ付テハ疑  
團アル可シ蓋シ此場合ニ於テハ保險人ハ其干預ス  
ル爲メ償金ヲ受ケクル一種ノ保証人ニ過キヌ○吾  
人ニ於テハ保險カ此災害ニ適用シ得ルモノト信セ  
ス蓋シ何レノ場合ニ於テモ自己ノ無資力等ニ付キ

保險ヲ依頼セント欲スル權利者アルモ之レカ爲メ  
保險人トナル者恐ラクハ少々ナル可ケレハナリ  
「生命上」ノ保險ト稱スルノ慣習アルモノ即チ吾人カ  
「死去ニ對スル」保險ト稱スルヲ撰擇スルモノハ之レ  
ヲ以テ陸上保險中ニ算入ス可シ○吾人ハ本章ノ初  
メニ於テ注視セシカ如ク保險ハ災害ノ生スルコトヲ  
妨ケス唯成ル可ク其結果ヲ賠補スルモノナレハ火  
災ニ對スル保險及ヒ「死去ニ對スル」保險ト稱スルハ  
其當ヲ失シタルモノニアラス  
本條ノ法文ニテハ已上ノ保險ハ（其豫見シタル死去

ノ原由如何ニ拘ラス陸上保險ナルヲ説キタリ故  
ニ右ノ保險ハ航海中ノ死去ヲ豫見シテ定ムルヲ  
得可シ然レモ之ヲ以テ海上保險ト混ス可ラス何  
トナレハ彼ノ海上ノ保險タル海路ヲ運搬スル商品  
及ヒ船舶自ラニ基キテ設定スルモノニシテ人ノ生  
命ヲ目的ト爲スモノニアラサレハナリ  
故ニ或ル人航海中其生命上ニ即チ其死去ニ對シテ  
保險契約ヲ爲シタリトセン至此場合ニ於テ若シ其  
人旅行中ニ死去シタルハ保險ハ其効力ヲ生ス可  
キモノニシテ其人航海中ノ災厄ノ爲メ死去シタル

コアラスシテ疾病ノ爲メ死去シタルト上陸中内地  
ニテ死去シタルトヲ問フニ及ハス  
蓋シ最モ屢々生命保險契約中投保人ノ死去ニ付テ  
何等ノ種類ヲモ指定セサルヲ即チ死去ノ災厄ニ出  
テタルト自然ニ出テタルトヲ問ハス死去ニ關シテ  
何等ノ特別原由ヲモ指定セサルヲアル可シ去リ連  
テ保險契約ハ尙ホ偶生ノ性質ヲ具フルモノタル可  
シ何トナレハ彼ノ死去ノヲタル多少遲速アルモノ  
ニシテ彼ノ保險契約タル概シ被保者ヨリ仕拂フ可  
キ保險料即チ年金額ニ基キテ定ムルモノナルカ故

ニ被保者ノ死去速カナレハ爲メニ其仕拂ヒタル保  
險料ノ額僅少ナルモ保險者ハ其受收シタル保險料  
僅少ナリトテ償金ヲ減少スルヲ能ハス其全額ヲ被  
保人ノ相續人ニ拂ハサル可ラス又之レニ反シテ被  
保者長生スルモハ巨額ノ保險料ヲ拂フテ其償金ノ  
額僅少ナルヲアル可シ○蓋シ被保者ノ長生ヨリ生  
スル己上ノ不利ヲ補フ可キ理財上ノ方法ヲ發見シ  
タレハ後日其場所ニ於テ指定ス可シ

第八百二十九條

陸上保險ハ相互ノ保險タルヲアリ

又定料保險タルヲアル可シ

註解

第八百二十九條 第一ノ陸上保險契約ハ相互ノ方法

ヲ以テ定ムルモノナリ然レモ右ノ方法タル漸々ニ  
減少シ恐ラクハ遂ニ全ク消滅シテ定料保險ノ方法  
ヲ以テ之レニ代フルニ至ル可シ  
然ルニ一個人タル者ハ其良方法ナリト思惟スル場  
合ニハ相互ノ保險契約ヲ爲スノ自由ヲ有スルモノ  
ナレハ法律上之レヲ規定シ置クハ最モ其ノ宜シキ  
ヲ得タルモノトス○且ツ右相互ノ保險タル恐ラク  
ハ佛國ニ於ケルト等シク日本ニ於テモ保險契約ノ

實施ヲ始ムルノ方法タル可キナリ  
 蓋シ法律ハ第八百二十九條ニテハ先ツ保險ニ關ス  
 ル二個ノ方法ノミヲ指定シ置キ次テ右二個保險定  
 義ノ爲メニ別條ヲ設ケタリ

第八百三十條 相互ノ保險ハ數人間ニ約定スル民事  
 上ノ結合ニシテ其特定シタル災害ニ因リ財產ニ及  
 ホスヲアル可キ損害ヲ其社員各自ノ供資ニ應分シ  
 テ賠補スル爲メニ備ヘアル其共有資本ヲ用テ相互  
 ニ保險人且ツ被保人トナルニ在ルモノトス

## 註解

第八百三十條 今ヤ爰ニハ火災ニ對スル共同保險ヲ  
 假想セン○即チ右ノ保險タル同市街又ハ比隣ノ市  
 街ニ住居シタル數人ノ所有者間ニ於テ約スルヲア  
 ルモノナリ○蓋シ所有者中最モ深慮ニシテ最モ實  
 驗ニ富ミタルモノハ共同保險結合ヲ約束シ其約束  
 ニ從ヒ各結合者ニ其結合者中ノ一人又ハ公ケノ金  
 庫ニ其各自ノ保險セシメント欲スル不動産又タハ  
 動産ノ價額ニ應シテ相當ノ金額ヲ拂ヒ込マシム可  
 シ○而シテ右ノ金額ハ保險結合者中ニ火災ノ不幸  
 ニ罹ル者アルハ其損害ヲ償フノ資ニ供シ置クモ

ノトス○即チ右ノ場合ニ於テハ結合者各自ニ償金  
元資ノ一部ヲ分擔セルカ故ニ右結合者ハ他ノ結合  
者ノ保險者ニシテ又他結合者ノ被保者ナリト云ヒ  
或ハ又結合者各自ニ其保險者ナリト云フモ敢テ失  
當ノコニアラサル可シ  
若シ結合資本ヲ以テ火災ヨリ生シタル損害ヲ全償  
スルニ足ラサルハ定款中災害ノ補償ニ充テタル  
金額不十分ナル場合ニハ各結合者ノ出金シタル元  
金ノ高ニ應シテ拂ハシム可キ補足金額ヲ以テ之レ  
ヲ填補ス可シトノコヲ定メタルハニアラサレハ其

損害ヲ全償スルコトナカル可キナリ  
蓋シ共同保險ニ關スル此簡單ナル結合方法ニハ大  
ニ不利アルモノニシテ即チ結合者災害ニ遭逢セシ  
ル其共有資本ヲ以テ損害ノ全償ヲ受クルニ確實ナ  
ラス且ツ縱令ヒ被害者償金ノ不足額ノ爲メ補足金  
ヲ請求スルト雖モ其請求金額ヲ得ルコト難キノ恐レ  
常ニ之レアル可シ何トナレハ各結合者災害ノアラ  
サル前ニハ或ハ之レアラサル可シト思惟シ好テ出  
金シタル者モ己ニ一旦他ノ被害結合者ニ結合資本  
ヲ以テ損害ヲ償ヒタル後ハ將來到底自己ノ爲メニ

ハ毫モ益スル所ナカル可キヲ知り更ニ補足金額ヲ  
 支出スルヲ好マサル可ケレハナリ  
 尙ホ其他數人ニテ組成セシ結合ニハ管理ヲ要シ從  
 テ人員ノ給料ヨリ結合ノ監視并ヒニ物件鑑定ノ費  
 用等ヲ要スルコトアル可シト雖モ結合者ハ各自ニ職  
 業ヲ有スレハ其共同利益ノ爲メニ供ス可キ時間ヲ  
 有スルコト少ナク從ツテ早晚結合者間ニ厭倦ヲ生シ  
 遂ニ其結合ヲ解散スルニ至ルカ如キコトアル可シ  
 然レモ是等ノコトタル日本ニ於テ共同保險ヲ豫定セ  
 サルノ一理由ニアラサルナリ

爰ニテハ會社ノ名義ヲ用ユルヨリハ寧ロ結合ノ名  
 義ヲ用ユルヲ以テ優レリトセリ何トナレハ爰ニテ  
 團結ノ目的ハ實益ヲ得ルニアラスシテ損失ヲ避ク  
 ルニアルモノナレハナリ○即チ右ノ如キコトハ佛國  
 ニ於テモ之レアル所ニシテ此場合ハ勿論尙ホ他ノ  
 場合ニテモ實益ヲ得ルノ目的ニアラスシテ數人其  
 カト資金トテ并合シ團結シタルモノハ只タ注意所  
 爲タルニ過キササルナリ即チ文學會理學會慈善會比  
 隣ノ所有間ニ結約スル所謂水利土工會ノ如キ是ナ  
 リ



又法律ハ共同保險ノ結合ヲ以テ(民事上)ノモノト稱スルノ注意ヲ取リタリ何トナレハ右ノ性質タル彼投機ノ目的ニテ組成スル商事會社タル定料保險會社トハ其區別明瞭ナレハナリ○即チ第八百三十二條ニ於テ定料保險會社ニ關シタル右ノ性質ヲ詳説ス可ケレハ爰ニテハ只共同保險ノ結合ニ關シテノミ説キ右ノ結合ニ於テハ結合者何等ノ利益即チ何等ノ利潤ヲモ搜索セサルモノナレハ此結合ハ民事上ノモノニ外ナラサルヲ説クニ止マル可シ○固ヨリ利益ノ搜索ハ總テ商事ノ性質ヲ有スルモノニ

アテサル可シ然レモ搜索ス可ク又實有ス可キ利益ノ絶ヘテ之レナキ場合ニハ商業ノ事ナキハ殆ソト疑ヒナカル可シ

其他共同保險結合ニハ通常ノ民事會社ト異ナリタル特別ノ性質アルモノニシテ即チ右ノ結合ニテハ原契約ヲ改メ又之レヲ變更スルヲナク只タ結合資本ノ増額アルノミニテ常ニ新結合者ヲ加フルヲ得可ク又之レニ反シテ結合者中ノ若干名脱退スル者アルモ會社ノ解散ナカル可キナリ故ニ共同保險結合ハ此點ニ付テハ無名即チ株式會

社ト類似スル所アルモノニシテ實ニ該種會社ノ資  
本ハ充分煩雜ナル條件ヲ以テスルニアラサレハ變  
易スルコトヲ得サルモノナルモ社員ノ人員ハ豫メ定  
メタルモノニアラス又其人員ヲ制限シタルモノニ  
モアラサレハ別ニ會社ノ存立ニ變更ヲ加ヘスシテ  
社員ノ數ヲ増減スルヲ得可キモノナレハナリ

第八百三十一條 定料保險ハ被保人ヨリ保險人ノ負

擔シタル危險ノ繼續ス可キ時間ニ從ヒ其危險ノ對  
價トシテ右保險人ニ支拂ヒ又ハ支拂フ可キ額ノ定  
マリタル金圓即チ保險料ヲ以テ約スルモノトス

註解

第八百三十一條 定料保險ハ相互保險ノ爲メニ指示

シタル如キ不利ヲ顯スルモノニアラス  
第一 被保者ハ其損害ノ一部分ノミニ付テ償金ヲ  
受ケ又ハ保險料ニ補足額ヲ附加スルノ義務ヲ負フ  
ヲ恐ル、ニ及ハス何トナレハ被保者其損害ニ關シ  
テ必要ナル證明ヲ爲セハ約權シタル金額ヲ受クル  
ハ確實ニシテ又保險料ハ(概チ年金)確定シタルモノ  
ナレハ損害全部ノ補償金ヲ受ケテモ毫モ附加スル  
所ナカル可ケレハナリ

第二 又被保者ハ結合シタルモノニアラサレハ其相互ノ間ニ何等ノ關係ヲモ有セス從ツテ共同利益ノ管理ヲ憂フルニ及ハス又被保者ヲ増加シ保險價額ヲ監査シ償金ヲ仕拂フ前ニ災害ノ原由及ヒ其結果ヲ證明スルモ被保者ノ擔當スル所ニアラス是等ノ事總テ保險者負擔タル可キナリ蓋シ實際ニテ保險者ハ鞏固ナル組織ニテ巨額ノ資本金ヲ運用スル會社ニシテ被保者ノ數ヲ増加シ之レニ依リテ償金額ニ比シテ成ル可ク保險料ノ高ヲ減額シ被保者便宜ヲ計リ得ルモノナリ○故ニ一人

ニテ保險者トナリ火災ニ對シテ他人ヲ保險スルカ如キトアル可ラス何トナレハ右ノ如クスレハ保險者ハ少額ノ保險料ヲ得ル爲メ非常ノ危險ヲ冒ス可ク又被保者ハ約束ノ償金ヲ受クル能ハサル大ナル危險ヲ冒ストアル可ケレハナリ○若シ又保險料非常ニ巨額ナルキハ保險人ノ方ニ利アル右ノ保險事業ハ賭事ノ性質ヲ有ス可ク而シテ其賭事ノ果シテ有効ナルヤ否ヤノ點ニ付テ尙ホ疑ヲ懷クヲ得可キナリ之レニ反シ若シ會社ニテ保險ヲ爲シ被保者多人數

ヲ集合シ得タルハ保險ノ偶然ノ性質減少シ益賭博ト相異ナルモノナリ○實ニ偶然ニモ亦タ「其法」ト稱スルヲ得可キモノアルコトハ人ノ認定シタル所ナリ蓋シ或ル時間中ニハ通常不慮ノ事實モ多少平均ノ度數ヲ以テ發生スルモノナリ例ヘハ千戸ノ家宅中一ヶ年平均一戸五戸乃至十戸ハ火災ニ罹ルコトアル可ク詞ヲ變シ之レヲ言ヘハ一萬若クハ十萬圓ノ價額ヲ有スル不動産中ニハ火災ニ因リ平均百圓五百圓乃至千圓ノ損害アル可キナリ保險會社斯クノ如キ多數ノ家屋即チ斯ノ如キ多額ノ家屋ヲ保險ス

ルニ至ルハ通常平均ノ賠償ヲ支拂フ可キナラ豫算スルヲ以テ甚シク其計算ヲ誤マルコトナカル可シ而シテ該會社ハ賠償ニ應シテ受取ル可キ保險料ヲ定メ相當ノ利益ヲ得ルヲ以テ被保人ト同時ニ併セテ自己ニモ利益ヲ與フルモノナリ且ツ定料保險會社ハ其本質ニ付テ之レヲ見又其歸着スル所ノ結果ニ付テ之レヲ見ルニ前條論スル所ノ民事會社ニテハ求索スルノ甚ダ不完全ニシテ且ツ實得スルノ薄弱ナル共同保險ヲ實行スルヲ趣旨トスルモノナリト謂フヲ得可シ

蓋シ定料保險會社ノ大ナルモノハ共同保險會社ノ  
管理シエラニス法ナリト看做スヲ得可キモノナリ

如斯會社ノ管理法ハ左ノ件々ヲ趣旨トスルヲ要ス  
ルモノナリ

第一 被保人ノ割前即チ出金高ヲ減少スルカ爲メ  
成ル可ク多數ノ被保人ヲ集ムルヲ求ムルヲ要ス故

ニ定料保險會社ハ「保險クニエー、マツシヨラニス牙商」ト稱スル特殊ノ會社員

ニ依リ保險ヲ受ケンコトヲ望ムモ自カラ先ンシテ之

ノヲ依頼セサル者ヲ探求ス保險牙商ハ其被保人ヨ  
リ得タル定料高ヨリ口錢即チ扣除金ヲ得ルヲ以テ

其賃金ト爲スノミナリ

第二 保險物品ノ概算價額及ヒ其他保險有効ノ條

件ヲ査定スルヲ要ス之カ爲メニハ定料保險會社ハ

前記ノ會社員ト異ニシテ之カ爲メ必要ナル特殊ノ

知識ヲ有スル者ヲ有ス

第三 出金ヲ受取り災害ニ罹リタル會社ニシテ賠

償ヲ得ルノ權アル者ニ之ヲ支拂フヲ要ス之カ爲メ

定料保險會社ハ會計法ヲ確定シ其計算迅速ニシテ

大ニ綿密ナルモノナリ

且ツ相互保險會社ニ於テハ被保人タル者同時ニ保

險人タルヲ以テ其管理ヲ監督シ共同ノ利益ヲ商議  
 スルカ爲メ屢々會合セサル可カラサルモ定料保險  
 會社ニ於テハ被保人會社員ニ非ラスシテ毫モ其會  
 社ノ事業ニ干與セス每歲定料拂込ヲ爲スノ一事ニ  
 付テノミ之ト關係ヲ爲スヲ原則トシ災害ノ生シタ  
 ル其輕重ヲ査定セシメ其賠償ヲ請求スルハ變則  
 ナリトス

定料保險會社ノ約款及ヒ條件ヲ定ムル証書ハ佛國  
 ニ於テ「ポリス、ダッシユラソスト」稱ス

第八百三十二條 定料保險ノ爲メ結ヒタル會社ハ商

事會社ト看做ス然レモ各被保人トノ合意ハ其被保  
 人商業者又ハ工業者ニシテ且ツ其保險ノ目的商業  
 若クハ工業ノ物件ニ係ルモト雖モ純粹ニ民事上ノ  
 モノトス

註解

第八百三十二條 前條掲クル所ニ因レハ定料保險會  
 社ハ商事會社タルヲ明カナリ何トナレハ是レ投機  
 ノ性質ヲ有スル行爲ヲ爲スモノニシテ家産ノ管理  
 處分ヲ爲サレハナリ  
 之レニ反シテ被保人ハ純然タル民事上ノ所爲即チ

其財産ノ管理處分ヲ爲スモノナリ而シテ陸上保險ノ民法中ニ存スルハ是レ即チ被保人ノ方ニ於テハ保險カ民事上ノモノナレハナリ

又海上保險ヲ商法ニ讓リタルハ是レ此保險カ商事ニ屬スル海上私法ノ他ノ部分ト緻密ニ關係シタルト又此保險カ被保人ノ方ニ於テ商業タリト主張シ得ルカ故ナリ

本條ニ被保人ハ商業者又ハ工業者ニシテ其商品又ハ製造品ニ保險契約ヲ爲シタルルルニ於テモ亦此保險ハ被保人ノ方ニ於テ民事上ノモノナリト定メ

ルハ是レ大ニ法律ノ注意ヲ爲シタル所ナリ

第八百三十三條 相互保險ノ民事會社及ヒ定料保險ノ商事會社ハ行政官廳ノ允許ヲ得タル上ニアラサレハ之ヲ有効ニ組成スルヲ得ス

註解

第八百三十三條 本條ノ條例ハ保險ニ關スル民事又ハ商事會社カ被保人ノ經驗ニ富マサルニ因リ若クハ該社設定者ノ粗暴又ハ詐欺ニ因リ被保人ノ爲メニ損耗ヲ生スルヲ防止セントノ目的ニ出テタルモノナリ○夫レ保險ノ試施タル日本ニ於テ既ニ之レ

ニ着手シタルモノニシテ本邦將來ノ爲メ大ニ保險  
 上ニ影響ヲ及ホスモノナリ而シテ若シ其試施ヲ遂  
 ケサリシキハ大ナル害惡トナル可シ何トナレハ其  
 試施ノ結果ヲ生セサリシ以上ハ其後チ久シキヲ經  
 ルマテ保險ノ實行ヲ延引ス可ケレハナリ  
 佛英及ヒ歐洲過半ニ於テハ政府ノ允許ヲ經ルニ非  
 サレハ保險會社ヲ設立スルヲ得ス  
 夫レ此ノ如キ會社ヲ設立セン爲メ日本政府ニ對シ  
 テ其允許ヲ請願スル片ハ其設立者ハ該社ノ定款ト  
 設立人名簿トヲ提出スルヲ要ス而シテ此定款ハ商

事會社ノ總則ニ適シ且社員間ト管理者トノ爲メノ  
 擔保ノミナラス殊更被保人ノ爲メニ成ルヘク諸般  
 ノ擔保ヲ供ヘスンハアルヘカラス且被保人ニ拂フ  
 べアルヘキ金額ノ重要ナルニ因リ會社ノ資本及ヒ  
 其積立金ハ當年及ヒ將來ノ年内ニ生スルべアルヘ  
 キ未來ノ償金ニ足ル程ノ充分ナル金額トナラサル  
 間ハ毎年ノ實益ヲ配當セサルべク要トス  
 若シ其允許ヲ請願スル會社ヨリ提出セシ定款ヲ許  
 容スヘキモノニ非スト認ムル片ハ其官廳ハ右定款  
 ノ變更取捨ヲ指示シ而シテ更ラニ請願書ヲ差出サ



シメタル後ニ允許ヲ附與ス可シ  
 扱テ此允許ヲ與フル管轄官廳ハ如何ナルモノナル  
 ヤハ本條之レヲ指定セス○此事項ニ付テハ一箇ノ  
 規定ヲ爲シ以テ此管轄ヲ定メ且此允許ヲ經ル爲メ  
 ノ手續キヲ定メスノハアルベカラス  
 定料保險會社ニ付テハ府知事縣令ヲ經由シテ中央  
 政府之レカ裁定ヲ下スヲ當然ナリ然レトモ相互ノ  
 保險會社ニ至リテハ定料保險會社ヨリモ其數少ナ  
 カルヘク且邊鄙ニ最モ多キモノナルベケレハ府知  
 事縣令ノ允許ヲ以テ充分ナリトス但シ總テ被保人

ハ其府縣内ニ居住スルノ條件ヲ具有スルヲ要トス  
 吾人ハ日本政府カ火災及ヒ其他之ニ類似ノ災害(洪  
 水、嵐、地震、獸疫)ニ對シ全國共同保險ノ方法ニ係ル論  
 究ヲ拋棄セザランコトヲ希望スルニ因リ今ヨリ一般  
 ニ渉ル注目ヲ爲シ以テ此事ヲ終ル可シ○本邦兩三  
 年前ニハ總テノ所有權ニ設置シタル特別税金ノ方  
 法ニ因リ政府ヲ以テ全國ノ保險人<sup>ニシテ</sup>ヲシメントス  
 ルノ問題起リタルコトアリ  
 前述ノ災害ニ付キ本邦ニ生シタル毎年ノ損失ニ付  
 キ統計表ヲ制定セリ○吾人ハ其損失ノ何程ノ點ニ

至リシヤハ之レヲ知ラスト雖モ其如何ニ拘ラズ唯  
 政府ニ因レル保險ノ原則ヲ論究セント欲スル而已  
 而シテ之レヲ論究スルニハ左ノ三箇ノ問題ヲ決定  
 ス可キニ過キス

第一 政府カ一般人民ニ對シテ陸上保險ヲ設置ス  
 ルハ正當ノ權利ヲ超過セシモノナル乎

第二 經濟上ノ點ニ於テハ全國共同保險ハ全國ニ  
 利益アルモノナルヤ如何

第三 此保險ニ關スル税金ヲ設定スルニ付キ其方  
 法ノ最モ簡短ナルモノハ何ナル方法ナルヤ

第一ノ問題○夫レ政府ノ主タル業務ハ人心ヲ憂鬱  
 ナラシムル數多ノ災害ニ對シ人民ノ身體ト財産ト  
 ヲ保護スルニ在リ

凡テ保險ニ關スル考案ノ順序ヲ定メ之レカ説明ヲ  
 爲サントスルニ方リテハ何人ト雖モ政府ヲシテ火  
 災豫防ニ關スル諸般ノ處置ヲ爲スノ權力ヲ有セシ  
 ムルニ付キ疑團ヲ生スル者アラサル可シ其處置ト  
 ハ藁葺板葺ノ如キ或ル性質ノ家根ヲ禁シ之レニ代  
 ユルニ瓦若クハ金屬ノ如キ不燃質ノ物ヲ以テスル  
 カ或ハ火ノ使用ヲ爲ス或ル工業ニ付テハ之レヲシ

テ困難ナル條件ナレモ豫防上緊要ナル條件ニ服従  
 セシメ以テ燃ユ可キ物質又ハ爆烈ス可キ物質ノ使  
 用ヲ規定スルヲ云フ○扱テ此ノ如ク政府ニ於テハ  
 或ル災害ヲ豫防スルニ方リ人民ノ自由ヲ妨ケ之レ  
 ニ金錢上ノ責任ヲ負ハシムルノ權利アルヲ認メ  
 シ以上ハ其災害ヲ賠補セントスルハ何ノ故ニ同  
 一ノ權利ヲ政府ニ許容セサル乎  
 抑モ災害ノ一般ノ賠補ニ付キ設定スヘキ税金ハ建  
 物及ヒ工業ノ自由ニ加ヘタル妨碍ヨリモ一層重大  
 ニシテ又一層困難ナルノミナラス該税金ハ總テノ

所有者及ヒ資産ノ性質ノ如何ヲ問ハスシテ概テ諸  
 般ノ資産ニ影響ヲ及ボスヲ明カナリ○然レトモ吾  
 人ハ火災ヨリモ尙ホ一層重劇ナル災害ノ事例ニ因  
 レハ災害ヲ賠補スル爲メ國民ニ負擔セシムル所ノ  
 政府ノ權利ハ該災害ノ豫防ニ關セシキヨリモ大ニ  
 確定シタルモノナルヲ見ル可シ  
 扱テ此災害トハ戦争ニ關スルヲ云フ  
 外國トノ戦争ヲ防止シ若クハ之レヲ減少センカ爲  
 メ政府ニ於テ兵隊、砲臺、軍艦ヲ増加センヲ欲シ隨  
 テ武器、軍裝、糧食等ヲ要スルヲアリトセンニ此場合

〓於テ政府ハ人民ヲシテ右ノ目的ニ關スル税金ヲ  
 負擔セシムルヲ得ルハ言ヲ俟タス而シテ是レ日  
 本ニ於ケルノミナラス諸般ノ邦國ニ於テモ亦實行  
 スル所ナリ今又戰爭ハ避クルニ難ク且ツ仮令其結  
 果ハ有利ナルモ土地又ハ人民ニ對シテ災害ヲ加フ  
 ルモノト想像センニ財産ト一家ノ維持トニ就キ妨  
 害ヲ受ケタル者ヲ補償スル爲メニ其戰爭ニ因テ妨  
 害ヲ受ケサル者ヲシテ政府ヨリ税金ヲ負擔セシム  
 ルニ付テハ何人ト雖モ之レヲ異議セス且ツ吾人ニ  
 於テハ人民ニ負擔セシムルヲ要スト斷言ス可キ

前ノ場合ニ於テハ災害補償ノ爲メ此ノ如ク顯然正  
 當ナルヲモ他ノ同一ノ場合ニ於テハ正當ナラサル  
 カ豈ニ其レ然ランヤ  
 且ツ政府ノ干涉ノ正當ナルヲハ尙ホ火災又ハ風災  
 ニ關シタルヲ以テ直接ニ説明スルヲ得可シ故  
 ニ國民ノ大數火災風災ノ爲メ損害ヲ被フリ而シテ  
 政府又ハ府縣廳ニテ多少重額ニシテ多少長期ニ度  
 リタル救助ヲ配賦シタリト仮定セシニ何人ト雖モ  
 補足税額ノ方法ニ依リテ有効ニ供給セシ右ノ救助  
 ヲ非難スル者ナカル可シ然ルニ全國共同保險方法

ノ前記ノ救助方法ト異ナル所ハ其被害者ニ與フル  
 ハ元資ノ償金ニシテ右ノ償金タル救助ノ如キ恩惠  
 ノ効力ヨリ生スルモノニアラスシテ被害者豫メ保  
 險料ヲ拂フタルヲ以テ其權利ノ効力ニ依リテ負擔  
 セラル、モノナルニ在リ然レモ一原則ノ果シテ正  
 當ナルヤ否ヤヲ査定スルニ其可否ニ影響ス可キ結  
 果ノ多少又ハ其結果ノ生ス可キ外形ノ如何ニ依リ  
 テ決ス可ラス

縱令ヒ爰ニテ償金ハ救助金額ヨリ一層巨額ナリト  
 雖モ右ノ償金タル分擔者各自ノ頭上ニテ同一ニ重  
 苛ナルモノニ非サル可シ何トナレハ右ノ償金タル  
 全國即チ總テノ財産ニ分擔セシムルモノナレハ負  
 擔者各自ノ頭上ニ課スル所ハ實ニ僅少ノ額ナル可  
 ケレハナリ且ツ償金ヲ受クル者ト雖モ亦共有資本  
 チ組成スル爲メ前以テ賦課金ヲ分擔ス可シ○是ノ  
 如クナルカ故ニ政府ノ組成スル全國共同保險ノ正  
 當ナルヤ否ヤノ論題ハ己ニ可決シタリ  
 第二ノ問題 第二ノ論題ハ全國共同保險ノ經濟上  
 ノ利益ノ有無ニ關スルモノナリ  
 右ノ論題ヲ可決スルニ固ヨリ疑ヒアルコトナシ

即チ右ニ關シテ前己ニ共同保險ニ付キ説キタル所  
 ナ再説シ且ツ一ノ例證ヲ示シテ論決ヲ鞏固ニス可  
 シ  
 爰ニ家屋所有者百人ヨリ成リタル火災ニ對スル共  
 同保險ノ結合アリト仮定セン而シテ一層問題ノ簡  
 易ナル爲メ各所有者ノ不動産ハ同一ノ價額ニシテ  
 各、一千圓ナリト仮定セン○即チ右所有者間ノ一人  
 火災ニ罹リタルモノアレハ各所有者ノ分擔部分ハ  
 千圓ノ百分一即チ十圓タル可シ是レニ由リ之レヲ  
 見レハ則チ經濟ノ點即チ一般ノ富ノ點ニ付テ論ス

レハ一人千圓ノ損失ヲ受クルハ寧ロ百人十圓ノ損  
 失ヲ受クルノ優レルニ如カザルナリ○千圓ノ元金  
 ヲ所有シ其十圓ヲ失フタリトテ僅ニ不快ヲ感スル  
 ニ止マリ別ニ元金ノ幾分ヲ剝奪セラル、感ヲ起サ  
 ンルヘキモ一人ニテ千圓(恐ラクハ其資金ノ全額)ヲ  
 失スレハ之レカ爲メ自己ノ生存ヲ確實ニシ併セテ  
 一般ノ富ニ及フ可キ殖産ノ方法ヲ剝奪セラル可キ  
 ナリ

若シ又百人ノ代リニ千人ノ結合者アリト仮定スレ  
 ハ各結合者ノ負擔ス可キ損失ノ部分ハ僅カニ一圓

ニ止マル可シ  
 今ヤ爰ニハ千人ノ所有者ノ代リニ國中總テノ家屋  
 所有者共同ニテ保險ヲ受クルモノト仮定センニ人  
 數ノ衆多ナルニ從ヒ災害ノ危險ハ増ス可キモ各共  
 同保險結合者ノ爲メニハ其分擔ノ部分ハ極メテ少  
 額トナル可シ○是レニ由リ之レヲ見レハ政府ノ保  
 險ハ全國共同保險結合タルニ過キサレナリ○然レ  
 此之レカ爲メ政府ハ定料保險會社ト異ナリテ利益  
 ヲ得ンヲ求ム可ラス政府ハ共同保險會社ノ管理  
 人タルノ任ヲ負フモノニシテ被保及ヒ保險不動産

ニ附シタル評價ヲ査定ス可キモノトス何トナレハ  
 此評價ハ二个ノ著シキ目的ヲ有スレハナリ蓋シ此  
 評價ハ火災ニ罹リタル所有者カ受取ル可キ賠償及  
 ヒ火災カ免カレタル者ノ供給ス可キ出金即チ割前  
 ノ基本タルモノナリ火災ノ場合ニ於テハ政府其原  
 因及ヒ效果ヲ査定シ被保者ノ權利ヲ指定ス可シ又  
 金即チ保險ノ特別租税ヲ受取リ災害ノ場合ニ於テ  
 賠償ヲ支拂フモノモ政府ナリ  
 第三ノ問題 仕様及ヒ方法ハ多少實驗ノ時間ヲ經  
 タル後ニ非スニハ確定スルヲ能ハサルナリ○當初

ニ在テハ前數年度ノ統計ニ據リ毎年ノ損失ノ平均  
高ヲ租稅ノ基本ト爲ス可シ○此金額ハ建家ノ評價  
ニ從ヒ他ノ租稅ノ如ク之レニ其從價稅ヲ課シ以テ  
國庫ニ納ル可キモノトス○若シ一年ノ火災斯ノ如  
ク得タル金額ニ超過スルハ翌年ノ出金高ヲ增加  
ス可シ又若シ其總額ヲ消盡セサルハ翌年ノ出金  
高ヲ減少ス可シ

國庫ノ官吏ハ之レカ爲メ増員スルコトアル可キモ方  
法ノ完備整齊スルニ及ンテハ其事務ノ多分ヲ他ノ  
官吏ノ任トスルヲ得可シ○我輩ハ此保險法ノ國ニ

裨益アルヲ確信ス

第二節 火災其他財産ニ及ボス損害ニ對  
スル保險

第八百三十四條 何等ノ物件ヲ問ハス其保存ニ付利  
益ヲ有スル者ニ非レハ其物件ヲ保險セシムルコトヲ  
得ス

然レトモ被保人其利益ヲ有スル者ノ如ク僞テ冒シ  
タル身分ヲ保險證書中ニ記載アル場合ニ於テ被保  
人其身分僞稱ニ根據シ保險契約ヲ無効ニシテ既ニ  
支拂フタル保險料ヲ返還セシメンカ爲メニ其無効



ヲ申立ルヲ許サス

註解

第八百三十四條 本條ニ被保人即チ物件滅失ノ場合  
ニ於テ賠償ヲ約權スル所ノ者此物件ノ保存ヲ以テ  
利益トスルヲ必要トセシハ保險ノ賭博タルニ至  
ラサルカ爲メナリ否ラサレハ何人ニテモ許多ノ家  
チ保險セシメ以テ其中一個又ハ數个ノ燒燬セン  
チ希望スルヲ得可キナリ○勿論一層多數ノ定料ヲ  
支拂ハサル可ラスト雖モ「概算」ニ據リ即チ所謂「偶然  
ノ法」ニ據レハ被保家屋ニ應スル火災ノ運賦アル可

キナリ○斯ノ如キ所爲ハ全ク賭博ノ性質ヲ具フル  
モノナリ○又同時ニ保險ノ大原則即チ保險ハ決シ  
テ被保人ノ爲メ利潤、得益ノ原因タル可ラス唯賠償  
ヲ得ルノ權タル可シト云ヘル原則ニ背クモノナリ  
然ルニ物件ノ保存ヲ以テ毫モ自己ノ利益トセサル  
者ハ其滅失ニ付キ損害ヲ被フルヲナシ故ニ賠償セ  
ラル、ノ權ナキモノトス

物件保存ヲ以テ被保人ノ利益トスルヲ要スル條件  
ノ他ノ一ノ理由ハ其滅失ヲ以テ毫モ利益トセズ從  
テ之レヲ容易ナラシムルヲ目的トセル詐欺ノ嫌疑

ナカラシカ爲メナリ  
 此條件ノ結果ハ若シ之レヲ履行セサルハ保險契  
 約ヲ取消シ得可キノミナラス無原因トシテ根本ヨ  
 リ無効ナルニ在リ  
 夫レ原由ハ合意有効ノ條件ナルノミナラス其成立  
 ノ條件ナリトノ原則ヲ遵守スル以上ハ此ノ如ク嚴  
 重ノ極點ニ迄至ラスンハアルヘカラス扱テ被保人  
 ノ物件保存ノ利益ハ正シク其關係スル保險契約ノ  
 正當ナル唯一ノ原由ナリ  
 原則ニ於テハ一箇ノ合意カ原由ノ無キ爲メ根本上

ヨリ無効ナルハ双方ノ者ハ其合意ノ無効ヲ功用  
 セシメ且其合意ニ據リ相互ニ供給セシモノヲ返還  
 セシムルヲ得可シ然レトモ法律ハ双方中一方ノ  
 者ニ對シ其惡意ノ罰トシテ取戻シテ拒絕スルヲ往  
 タニシテ是レアル所ナリ

茲ニハ被保人ニシテ自己ノ有セザリシ資格又ハ利  
 益ヲ詐リテ冒セシキニ右取戻ノ拒絕アルモノトス

第八百三十五條 被保人其物件ノ保存ニ付最早利益  
 ヲ有セサルニ至リタルキハ將來其保險ハ當然止息  
 スルモノトス

然レモ被保物件讓渡ノ場合ニ於テハ既ニ支拂フタル  
保險料ニ應當スル被保人ノ權利ハ其物件獲得者  
ニ移ル可シ但シ反對ノ契約アルキハ此限ニ在ラス  
然レモ被保人其物件獲得者ヲシテ己レノ位置ニ代  
ラシメサルキハ將來其保險止息スルモノトス但シ  
之カ爲メ保險人損害ヲ受ルキハ之ヲ賠償ス可シ

註解

第八百三十五條 本條ニ述フル所ハ前條ノ結果ナリ  
即チ被保人其被保物ノ保存ニ利益アル者タルヲ要  
スル以上ハ唯々其保險契約ヲ爲セシ時ニ於テ

利益アルヲ要スルニ止マラスシテ尙ホ其契約期限  
間ニ於テモ此ノ如クナルヲ要スルヤ明カナリ而シ  
テ契約ノ原由止息スルキハ將來ニ向テ其効力亦止  
息セズンハアルヘカラス是レ法文ニ記載スルノ注  
意ヲ爲セシカ如ク法廷ニ訴ヘスシテ法律上當然ニ  
止息スルモノトス  
然レトモ被保物移轉ノ場合ニ於テハ例外規則ヲ設  
クルト至當ナリ○例ヘハ被保人共同保險ニ付キ既  
ニ其賦金<sup>ニチギシヨシ</sup>ヲ支拂ヒ又定料保險ニ付キ既ニ毎年ノ保  
險料ヲ支拂フタル後チ其被保物ヲ賣却シ又ハ之レ

ヲ贈與スルハ保險人ハ既ニ利益ヲ得タルモノナ  
 レハ之レヲシテ災害ノ損毛ヲ免カレシムルハ正當  
 ナラサル可シ○又其舊所有者ハ災害ノ生シタル場  
 合ニ於テ毫モ賠償ヲ受取ント主張スルヲ得ス何  
 トナレハ該所有者ハ既ニ其物件ヲ贈與シ又ハ賣却  
 シタルヲ以テ災害ノ生シタルカ爲メ何等ノ損害ヲ  
 モ被ラサレハナリ故ニ其被保物ノ獲得者ハ賠償ノ  
 一ニ付キ何等ノ合意ヲモ爲サス又其物件ニ保險契  
 約ヲ附シタルヲ知ラサルト雖モ其賠償ハ將來  
 ニ於テ右獲得者ニ屬スヘキヲ當然ナリ○然レトモ

被保人ハ獲得者ヲシテ其殘存スル時期ニ應當スル  
 保險料又ハ賦金ノ一部ヲ返還セシムルヲ往々是レ  
 アリ

然レトモ其保險ノ殘存スル時期ニ付キ保險料又ハ  
 賦金ノ未タ支拂ナカリシハ其保險ハ効力ヲ生ス  
 ルヲ止息ス但シ被保人其被保物ノ獲得者ヨリ一  
 身上ノ代位ノ種類ニ因リ自己ノ位置ニ代ラントノ  
 承諾ヲ得タルハ格別ナリ而シテ保險カ右ニ述フ  
 カ如ク其正當ノ消滅時期前ニ解除シタルハ保險  
 人ハ被保人ヨリ償金ヲ受取ル可シ是レ蓋シ保險人

カ被保人ノ所爲ニ因テ失ヒシ所ノ利益ノ運命ニ基  
キシモノナリ

第八百三十六條 保險ハ財産管理ノ所爲ト看做ス故  
ニ自己ノ財産ヲ管理スル權利ヲ有スルニ過キサル  
者及ヒ其財産有權者ノ合意上、法律上若クハ裁判上  
ノ各代人ニ於テ有効ニ保險ヲ結約スルヲ得ヘシ  
事務管理者モ亦財産有權者ノ名義及ヒ擔當ニテ保  
險ヲ結約スルヲ得ヘシ

註解

第八百三十六條 夫レ保險ハ確定シタル少額ノ供給

即チ毎年ノ入額ヲテ支拂フニ足ル所ノ供給ノ方法  
ヲ用ヒ償金ニ因テ物件ノ將來ノ滅失ヲ賠補セゾト  
ノ目的ニ在リ故ニ保險ハ物件保存ノ性質ヲ有スル  
モノニシテ由シヤ其同一物ヲ保存セサルモ其有價  
物ヲ保存スルモノナリ、保險ハ物ノ毀損ヲ豫見セサ  
ルモ其有價物ノ滅失ヲ豫見ス○故ニ保險ハ管理處  
分ノ性質ヲ有スルモノニシテ之カ爲メ法律ニ説明  
シタル二箇ノ結果ヲ生ス可シ  
第一 自己ノ財産ヲ處分シ得サルモ之レヲ管理ス  
ルヲ得ル者例ヘハ後見ヲ免レタル幼者ノ如キハ

火災及ヒ其他ノ災害ニ對シテ自己ノ財産上ニ保險  
 契約ヲ爲スコトヲ得可シ  
 第二 代理人、後見人、夫、分取財産取扱人、空位相續財  
 産管理人ノ如キ他人ノ財産管理ノ任ヲ帶ヒタル者  
 其監査及ヒ管理ヲ司トル所ノ財産ヲ保險セシムル  
 コトヲ得可シ○然レモ代理人ハ其管理財産ヲ保險セ  
 シムルヲ得可シト云フニ過キスシテ之レヲ保險セ  
 シメサル可ラスト云フニアラズ何ントナレハ彼保  
 險ノ用タル其最モ利アル邦國ニ於テモ未ダ普通ニ  
 行サルノミナラズ尙ホ保險方法ニ依テ其財産ヲ變

全ク計ラサル者ヲ非議シ得サルノ程ニテ其利害ニ  
 關シテハ頗ル議論アルモノナルヲ以テナリ○然レ  
 モ本條ノ法文ニ記載セシ三資格中ノ一ヲ具スル代  
 理人ハ其委任ヲ受ケシ者ヨリ特別ニ其管理財産ヲ  
 保險セシムルノ任ヲ受クルヲ得可ク即チ此場合ニ  
 於テハ命ニ從ヒ其保險ヲ約セサル可ラサルナリ  
 本條ハ代理契約外ニ尙ホ簡單ナル事務管理ノ契約  
 ノヨリ以テ保險ヲ約シ得ルコトヲ認可シ以テ其法文  
 ヲ結了セリ○事務管理人其管理事務ニ關シテ有効  
 ニ使用セシ一切ノ費額ニ付テハ其管理委托人ニ對

シテ訴權ヲ有スルコトヲ說キタリシ(第三百八十三條)  
 ○然レモ爰ニテハ右ノ訴權ヲ附與スルニ踰越スル  
 ナ得可シ

若シ事務管理者ノ保險モシメタル財產其豫見  
 ル災害ニテ消失シ管理委託者ニ於テ其償金ヲ受收  
 セシキハ事務管理者賦金又ハ保險料トシテ仕拂ヒ  
 タル金額ヲ該償金中ヨリ取立ツルノ權利ヲ有ス可  
 シト云フニ踰越セサル可キハ固ヨリナリ是レニ由  
 リテ之レヲ見レハ即チ若シ又災害ナキハ保險料  
 又ハ賦金ハ有益ニ使用セシモト見做ス可キ得

ガ如シ○然ルニ其保險ニシテ或ハ豫見セシ危險  
 故ヲ以テ或ハ保險料ノ少額ナルニ依リ極メテ利益  
 アル條件ヲ以テ約シアリテ管理委託者自ラ該保險  
 ナ約シタルナラントノヲ殆ント確實ナリトセシ平  
 管理者ハ之レニ憑據シテ其保險料トシテ仕拂ヒタ  
 ル費額ヲ管理委託者ニ請求スルコトヲ得可シ

第八百三十七條 虛有權者ノ爲サシメタル保險ハ入  
 額所得者ヲ利シ又入額所得者ノ爲サシメタル保險  
 ハ虛有權者ヲ利ス可シ但シ第九十四條ニ規定シタ  
 ル條件ニ從フ可キモノトス

然レトモ若シ入額所得者ニ於テ自己ノ爲メニスル  
ト虚有權者ノ爲メニスルトナ特定セスレテ建物ヲ  
保險セシメタルキハ先ツ第四十八條ニ設ケアル火  
災ノ責任ヲ虚有權者ニ對シ自カラ免カレンカ爲メ  
其保險ヲ爲サシメタルモノト看做ス可シ

註解

第八百三十七條 本條及ヒ以下ノ數條ニ於テハ火災  
其他ノ災變ヨリ生スル損害ニ對スル保險ヲ爲サレ  
メ得ルハ何人ナルヤノコヲ示定セリ○即チ本條ノ  
條例タル自己ノ名義ヲ以テ物件ヲ保險セシムル爲

メニハ其物件ノ保存ニ利益ヲ有セサル可キ然レ  
モ又代理人、管理者ノ如キハ他人ノ利益ヲ爲メ其人  
ノ名義ヲ以テ受托物件ヲ保險セシムルコヲ得可シ  
トノ原則ノ適用ニ外ナラサルナリ  
法律ハ先ツ爰ニ入額所得權ニ從フタル家屋ノ保險  
ニ關シ第九十四條ニ説キタル所ヲ再説セリ○其入  
額所得權ニ關シタル第九十四條ヲ爰ニ再説セシム  
保存ニ付テ全ク特別ナル此事項ニ關スル一切ノコ  
ヲ爰ニ集録スルノ利益アルニ因ルナリ○又此再説  
ハ第二項ノ主眼タル第九十四條ノ例外ヲ爰ニ挿入



スル用ニ供スルモノトス  
 入額所得者ハ其過失ノ法律上ノ推測ニ依リテ火災  
 ノ責任ヲ負フ可キモノナルカ故ニ右火災ニ對スル  
 保險ニ於テ其責任ヲ免カル、ノ方法ヲ求メタリト  
 推測スルハ實ニ當然ノコト云フ可シ  
 佛國ニ於テハ借家人ニ付キ法律上明記セシ此過失  
 ノ推測ハ(第千七百三十三條)入額所得者ニ付テハ之  
 レヲ明記セザリシカ故ニ(陸上保險ニ關スル法律才  
 キヲ以テ之ニ關スル一切ノコトヲ規定ス可キ)裁判  
 所ニ於テモ入額所得者ノ爲メタル保險ハ効力ヲ與

フルコトニ少シク懸踏セル所ナリ  
 故ニ若シ入額所得者其反證ニ依リ過失ノ推測ヲ破  
 リシカ又ハ其過失ハ火災ニ罹リタル家屋ノ價額及  
 ヒ保險者ノ負擔タル償金ノ全額ニ達セサルモノナ  
 ルコトヲ証明スルキハ第九十四條ヲ適用スルヲ得可  
 キナリ

第八百三十八條 建物賃借人其建物ニ付爲サシメタ  
 ル保險モ亦同シク第百五十二條ニ設ケアル火災ノ  
 責任ヲ所有者ニ對シ自カラ免カレンカ爲メ其保險  
 ヲ爲サシメタルモノト看做ス可シ

右ノ保險ハ其賃借人出火シ之カ爲メ延燒シタル隣家ノ賠償要求ニモ又其火災ニ因リ賃借權ノ止息シタルカ爲メ自カラ受ケタル損害ニモ當ツルコトヲ得ス但シ保險契約中ニ是等ノコトヲ約定シアルキハ格別ナリ若シ其特約アラサルキハ該保險ノ利益ハ賃貸シタル建物ノ所有者ニ歸スルモノトス

## 註解

第八百三十八條 借家人モ亦火災ノ場合ニ於テハ前條ニ示定セシ入額所得者ト同様過失ノ推測ニ從フモノナルカ故ニ(第一百五十二條)其責任ヲ免カレンカ

爲メ豫メ賃借家屋ノ保險ヲ爲サシメ置キ得ルハ勿論尙ホ其爲サシメタル保險ハ該責任ヲ免カレンカ爲メ爲サシメシモノト推測スルハ實ニ當然ノコトナリトス

尙ホ後日詳説ス可キ所ニシテ序ヲ以テ爰ニ注意シ置ク可キハ此場合ニ於テ縱令ヒ火災ニシテ借家人ノ過失ヨリ生シタルキト雖モ借家人ハ其保險人ニ對シテ償金請求ノ權利ヲ有スルノ證據己ニ充分ナリトノコト即チ是レナリ○然ルニ佛國ニ於テ學者ノ多數尙ホ此點ニ付テ疑ヲ抱ク者アルハ勿論又裁判

所ニ於テモ其不注意ニ依リテ火災ヲ出ダシタル者  
ニ保險ノ利益ヲ歸スルニ踰躐スルハ實ニ至當ノコ  
ニアラサルナリ

彼ノ借家人ハ猶ホ入額所得者ノ如ク火災ニ付テハ  
此他ノ損害ヲ受ク可シ

先ツ火災ニシテ借家人ノ過失ヨリ生セシモノトセ  
ンカ右借家人ハ其火災ノ爲メ延焼ス可キ隣人ニ對  
シテ其損害ノ責任ヲ負ハサル可ラス然レモ爰ニテ  
ハ最早過失ノ推測アラサルモノニシテ該火災ニ依  
リテ受ケタル直接ノ證據ハ隣人之レヲ示サ、ル可

ラス何トナレハ借家人ハ其隣人ニ對シテハ(賃借物  
件ヲ保存スルノ義務ヲ)有セサルヲ以テナリ○然レ  
モ其過失ハ證明シ得可キモノナルカ故ニ借家人ニ  
於テ所謂(隣人ニ對スル)保險ヲ爲シ置クハ最モ其宜  
シキヲ得タルモノト云フ可シ  
即チ以上ノ事タル被保人ノ過失ハ其償金受收ノ權  
利ヲ剝奪スルモノニアラサルヲ證スルノ證據ト  
爲スニ足ル可シ

尙ホ此他左ノ場合ニ於テ借家人ハ火災ヨリ生スル  
二個ノ重大ナル損害ヲ受ク可シ 第一 若シ借家

人ニ於テ賃借家屋雜作ノ爲メ費用ヲ爲セシ時 第  
 二 若シ借家人ニ於テ己レニ利アル條件ヲ以テ長  
 キ期限ノ賃借權ヲ有シタルニ家屋ノ毀滅ニ依リテ  
 其賃借權ノ終ル可キ時○即チ此場合ニ於テハ該二  
 種ノ損害ニ通シテ適用ス可キ程ノ償金額ヲ約定シ  
 得ルハ實ニ正當ノコナリ○然レモ若シ借家人右ノ  
 事カ保險ノ目的ナルコトヲ約定シ置クノ注意ヲ缺キ  
 タルキハ借家人ハ家屋所有者ノ管理人トシテ右ノ  
 約定ヲ爲シタル者ト見做サル可シ然ラサレハ實際  
 ニ於テハ特別ノ場合ニ逢フ毎ニ借家人カ其家屋ノ

保存ニ付キ如何ナル利益ヲ有セシモノナルヤヲ知  
 ルコト極メテ難キ所ナルヲ以テナリ

### 第八百三十九條 書入質ニ爲シアル建物ニ付其所有

者ノ爲サシメタル保險ハ其書入質ヲ有スル債主ノ  
 利益トナル可シ但シ其債主數名アルキハ先取權ノ  
 順序ニ從ヒ之ヲ分辨ス可キモノトス  
 又其順位ノ如何ニ拘ハラズ右債主中一名若クハ又  
 信用貸ノ債主中一名ノ爲サシメタル保險ニ付テモ  
 亦前項ト同シ但シ其保險料ノ賠償高ヨリ其保險ヲ  
 爲サシメタル者ノ利益ニ從來支拂フタル保險料ニ

應當ノ金額ヲ先キニ引去ル可キモノトス

註解

第八百三十九條 爰ニ法律ハ保險ニ附シタルモノニシテ火災ニ罹リタル家屋カ書入質ト爲リ居ルノ場合ヲ想像セリ

蓋シ保險ハ所有者ニ於テ爲サシメ又書入質ヲ有スル權利者ニ於テ爲サシメ或ハ又信用貸ノ權利者ニ於テ爲サシムルヲ得可シ○即チ右三箇ノ場合ハ法律上規定セシ所ニシテ其第一ノ場合ニ於ケル論決ヲ以テ他二箇ノ場合ノ論決ニ推及スルヲ得可

然ルニ己上ノ事タル佛國ニ於テハ至難ノ問題ニシテ最初ニハ裁判所ニ於テ家屋ノ所有者ニ於テ其書入質ト爲セシ家屋ヲ保險セシメシキハ火災損害ノ償金ハ果シテ何人ヲ利スルモノナルヤヲ知ルコトニ付テ其說一定セサリシ所ナリ○即チ右ニ關シテ第一ニ生スル意想ハ保險人ノ仕拂ヒタル償金ノ不動產ヲ代表スルハ猶ホ賣買代價又ハ所有權引上ケ償金ノ不動產ヲ代表スルカ如キモノニシテ右ノ償金ハ書入質ヲ有スル權利者間ニ其書入質ノ順位ニ從

フテ分與ス可キモノナリトノト是レナリ○然ルニ  
 右ノ意想タル法律上ニ其正條ナケレハ之レヲ論駁  
 スル者アルハ實ニ至當ニシテ遂ニハ實際ニ於テ之  
 レヲ遠サクルニ至リタル所ナリ○即チ論者ノ説ク  
 所ニ依レハ賣買代價ト或ハ一方ニテハ所有權引上  
 ノ償金或ハ他方ニテ火災損害ノ償金トノ間ニハ相  
 ヒ類似シタル所アラス○賣買及ヒ所有權ノ引上ニ  
 於テハ其代價又ハ償金ハ代價辨濟ノ義務ヲ負擔シ  
 タル當時ニ存在シタルモノニシテ讓渡セシ不動産  
 ノ對價物即チ之レヲ代表スルモノト云フヲ得可シ

然レモ彼ノ保險者ノ負擔シタル償金ニ至リテハ其  
 保險セシ不動産ノ毀滅セシ時ヨリ初メテ負擔スル  
 モノナルニ尙ホ之レヲ以テ不動産ヲ代表スルモノ  
 ト云フヲ得可キカ○固ヨリ償金ハ保險者ノ受收セ  
 シ所ノモノヲ代表ス可シト雖モ是レ決シテ不動産  
 ヲ代表スルモノニアラスシテ保險料又ハ年賦金ニ  
 外ナラサルナリ○是ヲ以テ償金ハ受收シタル保險  
 料又ハ年賦金ヲ代表スルモノト云フハ尤モ其實ヲ  
 得タルノト云フ可ク而シテ彼ノ保險ノ契約タル  
 偶生ノモノナルカ故ニ其仕拂ヒタル年賦金又ハ保

險料ノ少額ナルカ爲メ其償金大ニ之レヲ超過シ又  
 之レニ反シテ保險契約久シク存シタルノ故ヲ以テ  
 受收セシ保險料巨額ニシテ其償金極メテ少額ナル  
 ヲアル可シ○蓋シ右ノ事タル己ニ第九十四條ニ於  
 テ詳説セシ所ナリ(第一冊、百八十二乃至百八十四葉)  
 佛國裁判所ニ於テハ此事項ニ關シテ實ノ原則ヲ適  
 用シ保險ノ償金ハ別ニ特別ノ約定アル場合ヲ除キ  
 テ區別ナク總テノ權利者間ニ其債主權ノ高ニ應シ  
 テ分配スルモノトセリ○然レモ今日ニ於テハ權利  
 者此約定ヲ爲スヲテ缺カス而シテ書入質ヲ有スル

權利者書入質設定ノ契約書中ニ償金ヲ以テ其債主  
 權ノ辨濟ニ宛ツ可シトノヲ記入スルヲ注意シ  
 己ニ不動産ニシテ保險ニ附シアルハ償金ニ關シ  
 タル未必ノ權利ヲ己レニ移轉センヲ要求シ而シ  
 テ保險會社ニ其讓受ヲ通知ス可ク若シ又未タ不動  
 產ヲ保險ニ附シアラサルハ前同様償金受收權ノ  
 移轉ヲ以テ豫メ不動産ヲ保險ニ附スルヲ要求ス  
 可シ且ツ佛國ニ於テハ書入質ノ設定ハ公式ノ所爲  
 即チ公證人ノ前ニテ爲ス可キ所ニシテ此法式ヲ欠  
 ケハ無効ニ屬スル所爲ナルカ故ニ右ノ公書ヲ調製

スル公證人又ハ書入質ヲ有スル權利者ノ利益ノ爲メ之レニ關係スル者ニ於テ此約定記人ノコトニ注意ス可キナリ

然レモ右ニ關スル權利者又ハ公證人ノ注意カ償金ノ未必利益ヲ慥カシムルノ力ヲ有セサル場合アリテ存ス可シ即チ(結婚シタル婦、幼者、禁治産者)法律上ノ書入質、裁判上ノ書入質(佛國民法第二千百三十三條)又ハ(賣主、共同分得者若クハ其他ノ者ノ)法律上ノ先取特權ニ關スルノ場合はレナリ  
此等ノ場合ニ於テハ物上抵保ハ合意ヨリ生スルニ

非スシテ法律上ヨリ生スルモノナレハ特別ノ約權ハ茲ニ何等ノ影響ヲ及ホスモノニ非ス殊更既婚ノ婦、幼者及ヒ禁治産者ノ書入質ノ權ヲ有スル場合ニ於テハ毫モ影響ヲ及ホサルナリ何トナレハ其夫ト若クハ後見人ニ對スル彼等ノ債主權ハ概シテ權利者ノ隨意ノ所爲ヨリ出テサレハナリ然ルニ賣主又ハ共同分派者ノ特權アル場合ニ於テハ賣買及ヒ分派ハ隨意ノモノナレハ豫メ其賣買又ハ分派シタル不動産ノ保險ト償金ニ關スル權利ノ轉移トニ服從シタルモノナルコトアル可シ然レトモ此場合ニ於



テハ公證人ノ強令ノ干與ナカルベク又賣主若クハ  
 共同分派者ハ常ニ法律ヲ知ラサルコトアルヘキ者ナ  
 レハ或ハ往々此緊要ナル注意ヲ怠タルコトアルヘシ  
 故ニ所有者其建物ヲ書入質ト爲シタル前後ニ於テ  
 保險契約ヲ爲セシキニハ法律ノ保護ニ因リ結約者  
 ノ了知セサルコト若クハ其不注意ヲ補足スルハ適理  
 ニシテ又正當ノコトナリ即チ火災ノ生シタル場合ニ  
 於テハ償金ハ書入質アル權利者等ヲ利ス可シ尤モ  
 此權利者等ヲ利スルニハ彼等カ其不動産ノ差押賣  
 却又ハ引上ケアリシキニ辨濟ニ干與シタルヘキ順

序ニ從フヘキ者トス  
 保險人ハ直接ニ此償金ノ轉移ヲ知了シタルコトヲ要  
 セス蓋シ此轉移ハ適法ノモノナレハナリ又各權利  
 者ノ辨濟ヲ受クル順序モ亦然リ何トナレハ此順序  
 ハ書入質ノ記入若クハ其他後文掲クルカ如ク其事  
 項ニ必要ナル手段ニ因テ規定セラルレハナリ  
 又此ノ如ク書入質ノ權利者ニ償金ノ權利アリト法  
 律上ニ認許シタルコトハ完全ニシテ唯書入質及ヒ保  
 險ノ契約ノ沉默ニ付シタル場合ノ爲メノミニ關ス  
 ルモノナルヤ又ハ被保人ト保險人トノ間ニ爲シタ

ル特別合意ニ因テ變更セラル、モノナルヤト問フ者アルヘシ

吾人之レニ答ヘテ云ハンニ償金ヲ受クヘキ書入質アル權利者ハ其承諾ナクシテハ他ノ權利者ヨリ右ノ償金ヲ奪取セラル、トナシ、然ラサレハ義務者ニ於テハ權利者中ノ順序ニ因テ利益ノ少ナキ者ニ償金ノ權利ヲ移轉シ以テ書入質ノ抵保ヲ減少シ又ハ之レチ存在セシメサルト容易ナリ○勿論是レ常ニ將來ノトニシテ火災ノ場合ニ關スルモノナリ然レトモ質物ノ將來ノ減少ヲ認許セサルトノ外ニ尙ホ

茲ニハ特別ノ危険アリテ是レ屢々吾人ノ論究セシモノナリ而シテ此危険トハ書入質ノ順序ニ付テ利益ナキモ償金ニ關スル權利ノ讓渡ニ因テ利益アル權利者ニ建物ノ火災ニ付テノ利益ヲ附與スルト是ナリ

故ニ本條第一項ノ條例ハ數多ノ書入質ノ權利者ノ承諾アルトニ非サレハ變更セサルヘキモノトス  
第二項ハ書入質ノ設定前又ハ其約條中一箇ノ約條ノ執行前ニ所有者ノ保險契約ヲ爲サ、リシトテ想像ス○此場合ニ於テハ順序ノ何タルヲ問ハス凡テ

書入質アル権利者ハ勿論其他信用貸ノ権利者等ト雖モ其利益ニ付キ自己ノ名義ヲ以テ保險契約ヲ結ビ若クハ所有者ノ事務ヲ管理スル者トシテ其所有者ノ名義ヲ以テ保險契約ヲ結フコトヲ得ルモノトス○此等種々ノ場合ニ於テハ保險ヲ爲シタル名義ノ何タルニ拘ハラズ其結果ハ前述ノ所ニ異ナルコトナシ即チ償金ノ拂ヲ受クルハ権利者ノ先取權ノ順序ニ循フカ若クハ権利者皆ナ信用貸ヲ爲シタル者ナルトハ其權利ニ割合シテ各々償金ノ拂ヒヲ受取ル可シ

此條例ヲ設定シタルハ深慮ニ出テタルモノナリ其故何トナルニ若シ法律カ書入質ノ順序ノ利益ナキ權利者又ハ書入質アル権利者ニ因テ先ンセラルヘキ信用貸ノ尋常ノ権利者ニ許スニ其一身上ノ名義ヲ以テ且其權利ノミノ抵保ノ爲メニ不動産ノ保險契約ヲ結フコトヲ以テセハ不動産ノ毀却ニ付キ此者ニ利益ヲ附與スルノ不都合ヲ生ス可シ何トナレハ是レ此權利者ノミ辨濟ヲ受クルノ運賦アルヘケレハナリ然ルニ是レ正シク此事項ヲ支配スル原則即チ被保人ハ物件保存ニ利益アルヲ要ストノ原則ニ

反スルモノナリ此條例ヲシテ全ク正當ナラシメン  
 カ爲メ法律ニ附記シテ曰ク此ノ如ク他ノ權利者ノ  
 事務ヲ爲シタル者ハ自己ノ支拂フタル保險料又ハ  
 賦金ヲ豫メ償金ニ付テ返還セラルヘシト是レ即チ  
 前述第九十四條ノ場合ニ於ケルカ如ク事務ヲ管理  
 セラレタル者ニ有益ナル管理ノ費用ニ外ナレ  
 第一ノ書入質アル權利者ハ他ノ權利者ノ保險契約  
 ナ結ヒシキハ最初ニ辨濟ヲ受クルノ利益ヲ有スル  
 モノニシテ尙ホ若シ自カラ保險契約ヲ爲スキハ自  
 己ノ債主權ノ價額ニ至ルマテノミノ保險契約ヲ爲

スノ利益ヲ有ス蓋シ他ノ權利者ニ於テ此ノ如キ契  
 約ヲ爲ストモ何等ノ利益ヲモ有セサルヘシ何トナ  
 レハ此ノ如ク減少シタル償金ハ他ノ權利者等ヲ利  
 スルコアラサルヘケレハナリ  
 然レモ若シ第一ノ權利者其債主權ノ高ニ付キ不動  
 産ノ保險契約ヲ爲シ而シテ火災前ニ其債主權ノ全  
 部若クハ一部ノ返還ヲ得タルキハ償金ニ付キ此權  
 利者ノ受取ラサルモノハ他ノ權利者ヲ利ス可シ而  
 シテ他ノ權利者ナキキハ所有者ノ利得トナル可シ  
 此ノ如ク第一ノ權利者カ自己ノ債主權ノミノ爲メ

ニ不動産ノ保険契約ヲ爲シタルハ先ツ此権利者  
ハ自己ノ拂フタル保険料又ハ賦金ヲ差引クノ権利  
アルヤ否ト問フ者アル可シ

此問題ヲ可決スルニ付キ疑ヒヲ容レサル一箇ノ場  
合アリ而シテ此場合ハ前文揭示セシ所ニシテ即チ  
此権利者カ全部ノ償金ヲ獲收セサル場合ナリ此場  
合ニ於テハ保険カ此権利者ヨリモ他ノ権利者等ヲ  
利シタルモノト云フ可ケレハ其出費ノ返還ヲ得ル  
ハ當然ノトトス

又償金カ此権利者ニ要ス可キ高ヲ超過セサルモノ

ナルハ保險ノ出費ヲ最初ニ引去ルヲ認許スル  
ニ付キ困難アル可シ是レ此者ヲシテ其権利者トシ  
テハ受取ラサル可キモノニ付キ尙ホ権利者ト爲ス  
ニ外ナカル可シ而シテ此権利者ハ此場合ニ於テモ  
亦其保險ハ所有者ノ義務ヲ免カレシメ以テ之レヲ  
利得セシメ又ハ其他ノ財産上ニ自己ノ参加スルニ  
付キ他ノ権利者等ヲ助ケテ之レニ利ヲ得セシメタ  
リト申述ス可シ然レモ此ノ如キ主張ハ嚴格ニ失シ  
タル論理上ノモノナレハ裁判所ニテ之レヲ採用ス  
ル程ノ効ハ蓋シ鮮少ナラン

第八百四十條 停止若クハ解除ノ未必條件ニ從フタル權利ヲ有スル者ノ爲サシメタル保險ハ其停止ノ未必條件成就シ若クハ解除ノ未必條件虧缺シタル場合ニ於テ其者ノ利益ト爲ル可シ  
 之レニ反對ノ場合ニ於テハ其保險ハ右權利讓渡人ノ利益ト爲ル可シ但シ其讓渡人ヨリ保險ヲ爲サシメタル者へ前條ニ定メアル如ク保險料ヲ還償ス可キハ勿論ナリトス

## 註解

第八百四十條 吾人ハ第四百二十八條以下ニ因リ停

止ス可キ未必條件ト解除ス可キ未必條件トノ性質及ヒ効力ヲ知了セリ○而シテ右第四百二十八條以下ノ註解ニ設定シタル所ヲ觀レハ結約者中ノ一方ノ者停止ス可キ未必條件ニテ一箇ノ權利ヲ獲得スルルハ讓渡者ハ解除ス可キ未必條件ニテ同一ノ權利ヲ保存スルヲ詳言スレハ停止未必條件ノ成就スルルハ此權利ハ消散ス可ク又現ニ讓渡ヲ爲シタルモ其讓渡ハ解除未必條件ニ服從シタルモノナルルハ讓渡者ノ權利ハ停止ス可キモノニシテ其解除ノ條件成就スルルハ發生スルモノナリト掲ケタリ(第

四百二十八條第四百二十九條註解ヲ看ヨ  
 若シ讓渡ノ停止未必條件成就スルルハ其効力ハ合  
 意ノ日ニ溯ルモノニシテ讓渡者ノ權利モ亦既往ニ  
 溯リテ解除スルモノナリ若シ又讓渡ノ解除未必條  
 件ノ成就スルルハ讓渡者ノ權利ハ是迄止息セサリ  
 シモノトシテ發生ス可シ  
 若シ又讓渡ノ停止未必條件ノ成就セサルルハ讓渡  
 者ノ權利ハ解除セスシテ常ニ完全ニ存セシモノト  
 シテ見做サル、ナリ若シ又讓渡ノ解除未必條件ノ  
 成就セサルルハ讓渡者ノ權利ハ發生セスシテ既ニ

合意ノルヨリ讓渡セシモノト見做サル、ナリ(第四  
 百二十九條)

右ノ未必條件ノ不定ナルルハ結約者ノ各自ハ火  
 災ニ對シテ物件ノ保險契約ヲ爲スニ利益アルヘシ  
 ○即チ若シ其保險契約ヲ爲シタル者ノ爲メニ將來  
 ノ事件有利ナルルハ是レ其已ノ固有ノ物件ヲ保險  
 シタルモノナリ若シ又其事件不利ナルルハ其保險  
 契約ヲ爲シタル者ハ他ノ一方ノ爲メニ管理處分ヲ  
 爲シタルナリ(第四百三十一條比較)故ニ此者ハ其保  
 存ノ爲メニ費シタル費用ノ返還ヲ得ヘキナリ

第八百四十一條 保險ノ目的其合意ノ時既ニ全部又ハ半ハ以上毀損シタル物ニ在ルキハ其保險契約ハ無効ノモノトス

若シ保ノ目險的被保人ノ保險財產ヨリ通常生ス可キ自然又ハ民法上ノ果實外ナル未必ノ利益ニ在ルキハ其保險モ亦無効ノモノトス

## 註解

第八百四十一條 本條以下ハ保險契約ノ有効ニ關スル二三ノ條件ヲ記載ス、此條件ハ保險契約ニ特別ナルモノナリ但シ此條件中既ニ賣買ノ事項(第六百八

十條)ニ於テ遭遇シ且諸般ノ契約ニ普通ノモノナリト謂ツヘキ第一ノ條件ハ格別ナリ  
實ニ一箇ノ契約ニシテ始メヨリ其組成即チ成立スルモノタルニ付テハ其契約ハ確定物ヲ目的トシタルヲ要ス故ニ其目的物ハ結約者ノ契約スル時ニ於テ存在セサルヘカラス○法律ニテ茲ニ此事ヲ説明スルノ注意ヲ爲セシハ是レ蓋シ保險契約ハ偶生ノ性質アルニ因リ茲ニ普通法ニ從ハサルヘシト信スル者或ハ之レ無キヲ保セサレハナリ然レトモ茲ニハ此ノ如ク信スヘキニ非ス何トナレハ既ニ滅失



シタル物件ヲ目的トシタルヘキ保險ハ最モ認許ス  
 ヘカラサル博戯ノ性質ヲ有ス可ク即チ既ニ成就セ  
 シ事實ニ付キ保險契約ヲ結フキハ双方ノ一方ニ毫  
 モ運賦ヲ生セサレハナリ○抑モ保險契約ハ保險人  
 ニ付キ偶生ノモノナルニ過キス(少ナクモ定料保險  
 ノ契約)然ルニ既ニ成就セシフニ關スルハ保險人  
 ハ毫モ有利ノ運賦ヲ有セスシテ必ラス償金ヲ拂ハ  
 サルヘカラサレハナリ  
 法律ハ物件ノ半己上ノ毀滅ヲ以テ其全部ノ毀滅ト  
 同視セリ是レ即チ前己ニ數回適用セシ所ノ理論ナ

リ(第四百三十九條、第四百五十三條參觀)然レモ契約  
 己前ニ生シタル最モ輕微ナル損傷ト雖モ其契約ノ  
 組成ヲ妨クルモノト爲ス可ラス  
 就中部分損傷アルノ場合ニ於テハ契約者其損傷ヲ  
 知ラサルモノト想像ス可キハ固ヨリナリ何トナレ  
 ハ若シ契約者ニ於テ其損傷アルヲ知レハ其殘存セ  
 ル部分ノミニ付テ保險ヲ約シタルモノト見做サ、  
 ル可ラサレハナリ○又全部ノ損傷ニ付テハ其知ル  
 ト知ラサルトチ問ハス前己ニ論シタル理由ニ依リ  
 其保險契約ハ無効タル可シ是他ナシ此場合ニ於テ

ハ保險ノ目的物ナケレハナリ  
 爰ニ法律ハ彼保險契約ハ博戲賭事ニ變ス可ラスト  
 ノ原則ヲ適用シ以テ不動産ノ増價又ハ商品價額ノ  
 騰貴ニ依リテ得可キ利益ノ如キ未必利益ヲ保險セ  
 シムルヲ禁シタリ  
 然レモ法律ハ其民事上ノモノナルト自然上ノモノ  
 ナルトヲ問ハス被保人所屬ノ財産ヨリ生スル果實  
 ノ保險ニ關シテハ例外ヲ設ケタリ○是ヲ以テ已ニ  
 播種セシ土地ヨリ生ス可キ收額住居ス可キ形態ヲ  
 有スル家屋ノ賃貸料ヲ保險セシムルヲ得可シ何ト

ナレハ爰ニハ未必利益ノ搜索ヨリハ寧ロ被保人ノ  
 希望ハ其性質產出シ得可キ元資ノ普通ノ收額ヲ保  
 險セシムルニ在レハナリ  
 然レモ家屋ノ減價又ハ商品ノ失價ニ付テハ法律上  
 別ニ規定セシ所ナシ是即チ保險契約ノ目的タル損  
 失ヲ豫防スルニ止マリ利益ヲ豫期スルニ在ラサル  
 ヲ以テナリ

第八百四十二條 保險契約ハ被保人ノ爲メ決シテ利  
 潤ノ原由ト爲ストナ得ス就中其合意ノ時ニ於ケル  
 物件ノ實價ニ超過シタル賠償額ニ付キ其物件ヲ保

險セシムルヲ得ス但シ其物件ノ價額増スヲアル  
 キハ其増價額ニ付キ更ニ保險セシムルハ格別ナリ  
 若シ又契約ノ時其物件ノ價全額ニ付キ最初ヨリ保  
 險ヲ爲サ、リシモノナルキハ後日其餘額ニ付キ同  
 一ノ保險人若クハ他ノ保險人ニ之ヲ保險セシムル  
 ヲ得可シ

註解

第八百四十二條 爰ニ法律ハ保險契約ヲ支配ス可キ  
 普通原則ヲ設定シ而シテ保險ニ關スル特別法律ア  
 ラサル邦國ニ於テハ彼保險ハ利益ヲ供スルモノニ

アラスシテ只損失ヲ豫防スルモノナリトノ原則ヲ  
 公告スルハ裁判所ノ任ナリトセリ  
 即チ前條第二項ハ此ノ主意ノ幾分ヲ包含セルモノ  
 ナリ

爰ニ設ケタル原則トハ彼保險ノ契約タル物件ノ保  
 存ニ利益ヲ有スル者ニ限リテ許可ス可キモノナリ  
 トノコ即チ是レナリ  
 若シ保險ハ被保者ノ爲ノ利益ヲ得ルノ原由トセン  
 カ被保者ハ約權シタル償金受取ノ權利ヲ與フ可キ  
 物件ノ損失ヲ利トス可シ然ルニ被保者ハ決シテ物

件ノ損失ヲ利ス可キモノニアラス何トナレハ若シ  
 保險ノ目的損失ヲ豫防シ或ハ損害ニ關スル正確ノ  
 補償ヲ得ルニアラスシテ償金ノ利益ヲ期スルモノ  
 ナルニ於テハ縱令ヒ被保者正直ニシテ自ラ其物件  
 ヲ損傷スルノ意ナシト雖モ災害(例ヘハ火災)ヲ豫防  
 シ之レヲ防禦スルノ熱心ヲ缺クコアル可ケレハナ  
 リ

若シ被保者其受ケタル損害(damnum)ノ補償ヨリ多  
 クノモノヲ受收スルモノトセンカ保險契約ニ關シ  
 テ用キタル償金ナル語辭ノ意義正數ナラサルニ至

ル可シ○法律ハ其設定ニ係ル原則ニ關シテ一切ノ  
 結果ヲ推定スルニ及ハスト雖モ或ハ其重要アルノ  
 故ヲ以テカ又法律ニ變換セシ所アルノ故ヲ以テ其  
 結果ヲ推定セサル可ラサルノ場合アリテ存ス可シ  
 保險物件ハ其契約ノ際評定セシ實價ヲ超過シタル  
 金額ヲ以テ保險セシムルヲ得ス然ルニ是クノ如ク  
 説キタリトテ被保者常ニ此評定價額相當ノ償金ヲ  
 得ルノ權利ヲ有ス可シトノ云ヒニアラス故ニ後日  
 此保險契約外ノ原由ニ依リテ災害ノ際物件ニ減價  
 アリタル場合ニハ其價額ニ應シテ償金ヲ減スルコト

アルヲ見ル可シ  
 故ニ千圓ノ價額アル家屋ノ火災ニ對スル保險ニ於  
 テ後來百圓ノ増價アルヲ仮定シテ千百圓ノ保險ヲ  
 爲サシムルコトヲ得ス且ツ家屋ノ價額千百圓ニシテ  
 其實價一千百圓ノ保險ヲ爲サシメシト雖モ若シ  
 火災ノ際ニハ其己前ニ遭逢シタル颶風ノ爲メ家屋  
 ニ百圓ノ減價アリタルトハ被保者ハ只千圓ノ償金  
 ヲ受クルノ權利ヲ有スルノミ  
 然ルニ被保者ハ其利益ニ關スルニ箇ノ制限ニ相當  
 シタルニ箇ノ權利ヲ有ス可シ

即チ最初ノ場合ニ於テ若シ保險物件ニ増價アリタ  
 ルトハ被保者ニ於テ補足保險ヲ爲サシムルヲ得可  
 ク又第二ノ場合ニ於テ家屋ニ減價アリタルトハ被  
 保者ヨリ後來ノ爲メ保險料若クハ年賦金ノ減額ヲ  
 請求スルヲ得可シトノリ是レナリ尤モ其己ニ仕拂  
 ヒタルモノヲ取戻スヲ得ス

本條第二項ニ於テハ被保者原保險契約ヲ以テ其物  
 件ノ全價ヲ保險ヒシメサルトハ其全價ニ達スル爲  
 メ保險ヲ補充スルノ權利ヲ被保者ニ認知シタリ○  
 又之レニ反シテ原保險契約上過當ノ價額ヲ定メア

ルルニハ被保者ヨリ其保険料ノ減額ヲ請求シ得ル  
ハ勿論ナリトノコヲ爰ニ附加ス可シ

第八百四十三條

補足ノ保険アラサリシ場合ニ於テ

ハ被保人ハ其保険ナキ價額ニ付キ自ラ之ヲ保險シ  
タル者ト見做サレ其物件一部滅失ノ場合ニ於テハ  
被保人ハ物件全部ノ中其保險セシメタル價額ニ割  
合シタル償金ノミヲ受取り他ノ一部ハ自己ノ責任  
ニ歸スルモノトス

註解

第八百四十三條

爰ニハ裁判所ノ採用セル所ニシテ

最初見ル所ニ依レハ隨分奇怪ナルカ如キモ絶テ公  
義ニ悖戻セサル一ノ原則ヲ見ル可シ

若シ物件實價ノ一部分ヲ保險セシメ而シテ該物件  
全然滅失セシトハ被保者其全部ノ補償金ヲ得ルコ  
能ハスシテ一部ノ損失ハ自己ノ負擔ニ歸セサル可  
ラス然ラサレハ只物件實價ノ一部分ノミヲ保險セ  
シメテ其全部ノ補償ヲ得ルノ理アラサレハナリ

例へハ實價一千圓ノ家屋ヲ單ニ五百圓ノ價額ノ爲  
メ保險セシメテ而シテ之レニ準シテ保險料ヲ仕拂  
ヒタリトセンニ若シ家屋全ク燒失センカ被保者其

保險ニ附セサル價額五百圓ノ損失ヲ自カラ負擔セ  
 サルヲ得ス若シ又家屋ノ半ハ燒失シタリトセンカ  
 何ノ故ヲ以テ被保者ハ五百圓ヲ受收シ其損失ノ全  
 部ヲ免ンコトヲ主張シ得ルヤ○即チ本條ノ法文ニ依  
 レハ被保者ハ只半額ノ損失ニ相當シタル償金ノ半  
 額ヲ得ルニ止マル可シ○若シ又家屋ノ五分一ノミ  
 燒失シタルニ於テハ(二百圓)被保者ハ只償金ノ五分  
 一百圓ヲ收受スルニ止マリ其餘ノ百圓ハ自己ノ損  
 失ニ歸セサル可ラス  
 蓋シ右ニ關シテ左ノコトヲ以テ論據ト爲スヲ得可シ

即チ保險ノ其保險物件實價ノ全額ニ達セサルハ常  
 ニ被保者ノ爲メニ其物件保存ノ利益ヲ存シテ之レ  
 カ注意ヲ欠カサラシメン爲メナリト○然レモ保險  
 契約ノ際其必要ナルヲ感シテ此條件ヲ設ケ置クハ  
 保險者ニ於テ爲ス可キコトニシテ被保者ノ爲ス可キ  
 所ニアラス○若シ法律上此ノ如キ制限ヲ設クルモ  
 ノトセンカ法律ハ合意ノ自由ヲ害シ恐クハ其適理  
 ノ權限ヲ超過シタルモト云フ可キナリ

第八百四十四條 被保人其物件價額ノ全部又ハ一部  
 ニ付キ既ニ保險セシメタルハ豫メ其旨ヲ新保險

人ニ告知スルニ非サレハ其新保険人ヲシテ有効ニ其物件ヲ更ニ保険セシムルヲ得ス

然レモ次條ノ規則ニ據リ第一ノ保険ヲ無効ニ爲シタルキハ第二保険ノ無効ヲ防止スルモノトス

第八百四十五條 被保人ハ又同物ニ付更ニ約セント欲スル第二ノ保険ヲ第一ノ保険人ニ告知ス可シ若シ其告知ヲ爲サスシテ第二ノ保険ヲ結約シタルキハ其以後第一保険ノ利益ヲ失フ可シ但シ第一保険人ノ權利ハ被保人ノ失權ニ拘ハラズ將來尙ホ先前ノ如ク毫モ減少セサルモノトス

若シ其告知ヲ適法ニ爲シテ第二ノ保険ヲ結約シタルキハ第一保険人ハ自己ノ隨意ヲ以テ第一ノ保険ヲ保持シ又ハ將來之ヲ取消ス可シ但シ之ヲ取消シタル場合ニ於テハ保險殘期ノ爲メ既ニ保險人ノ請取タル保險料ハ其半額ヲ返還シ又未タ請取ラサル保險料ハ將來其半額ヲ請求ス可キモノトス  
若シ又數箇ノ保険ヲ同日ニ約スルキハ本條第一項ノ規則ヲ其各箇ニ適用ス可シ

## 註解

第八百四十四條、第八百四十五條 爰ニ說カント欲ス



ル條例ハ之レカ證明ニ付テハ然ラサルモ其詳細ト區別トヲ説明スルニ於テ最モ難シトスル所ナリ  
 保險契約ニ於テ常ニ恐ル可キノ害ハ被保者法律上ノ禁制アルニ拘ラス保險ニ付テ利益ヲ得ントノ目的ヲ以テ同一ノ物件ヲ數人ノ保險者ニ托シテ保險セシメ共ニ重又ハ三重保險ノ發露セサルカ爲メ數個ノ償金ヲ受收スルコトアル可キ即チ是レナリ○是ノ如キノ危險ハ常ニ被保者ヲシテ物件ノ滅失ヲ利トセシム可シ

即チ此害ヲ避ケンカ爲メ法律ハ本條及ヒ次條ニ於テ被保者ニ其第二保險ニ前クテ豫シメ二個ノ通知ヲ爲スノ義務ヲ負ハシメタリ即チ被保者先ツ第一ノ保險者ニ其第二保險ヲ爲サシムルノ意ヲ通ス可ク而シテ法律ノ意ニ從フ爲メニハ新保險ハ如何ナルモノヨシテ且ツ幾何ノ金額ヲ以テ爲サシメタルモノナルヤノコトヲ記載セサル可ラス又第二ノ保險者ニ對シテハ二個ノ保險アルコトヲ通知ス可キモノシテ只此保險ヲ通知スルハ多分爲サシム可キモノニシテ近キニ爲サシムルノ事實トシテ通知スルニアラスシテ己ニ完充シタル事實トシテ通知ス可

キナリ

第二ノ保險者ノ地位ハ極メテ簡單ナルモノヨシテ  
 卽チ該保險者ヨ於テ同一ノ物件上ニ同一ノ危險ノ  
 爲メ己ニ保險ノ存スルヲ以テ更ラニ保險ヲ爲スノ  
 意ナキハ之レヲ拒絕スレハ可ナリ何トナレハ第  
 二ノ保險者ハ法律カ第八百四十六條ノ條例ヲ以テ  
 避ケントスルニ拘ラヌ其第一ノ保險者トノ間ニ生  
 スルコアル可キ混雜ヲ恐ル、ヲ以テナリ○然レモ  
 保險ヲ爲サシメタル危險ハ其己ニ保險セシメタル  
 危險ト同一ナラサルヲ得可シ故ニ第一ノ保險ノ通

知ハ常ニ被保者ノ義務タリ是レ他ナシ保險ノ危險  
 ハ異別ナルヤ又ハ同一ナルヤノコヲ定ムルハ被保  
 者ノ權ニ屬セス若シ第二保險者ヨ於テ危險ハ充分  
 異ナルモノナリトコヲ評定スルハ恐ラクハ保險  
 ヲ承諾ス可キヲ以テナリ  
 故ニ火災ニ對シテ己ニ一家屋ヲ保險セシメシニ第  
 一ノ保險者ハ其保險セシ危險ヨリ地震、颶風又ハ内  
 亂ヨリ生スル火災ヲ除キタルモ(外國保險證書中ニ  
 儘存スル除却)第二ノ保險者ハ此例外ノ危險ニ對シ  
 テ保險スルヲ得可シ

本條第一項ニ於テハ制規ノ通知ヲ爲サ、ル第二ノ  
 保險ノ無効タルヲ宣言セリ○故ニ此無効ヲ免レン  
 ト欲スル被保者ハ只ニ期日内ニ其第二保險ノ通知  
 ヲ爲ス可キノミナラス保險證書中ニ其通知ヲ記入  
 セサル可ラス蓋シ是ノ如ク保險證書中ニ通知ヲ記  
 入スルハ別證ヲ以テ認知ヲ與ヘシムルヨリ最モ簡  
 單ニシテ最モ確實ノ方法タル可シ

本條第二項ハ正條ナクテハ隨分議論ノ生ス可キ一  
 ノ場合ヲ規定セリ即チ第二ノ保險者ニ通知ヲ爲サ  
 ス又第一ノ保險者ニモ通知ヲ爲サ、ル場合ニシテ

此場合ニ於テ被保者ハ第八百四十五條第一項ニ從  
 ヒ第一ノ保險者ニ對シテハ其權利ヲ失フ可シ故ニ  
 只一個ノ保險即チ第二ノ保險アリテ存スルノミ即  
 チ此場合ニ於テ第二ノ保險者ハ第八百四十四條第  
 一項ニ記載セシ無効ヲ利用スルヲ得ス

且ツ被保者常ニ第一保險ヲ第二保險者ニ通知スル  
 ヲテ恐レ第一ノ保險者ニ制規ノ通知ヲ爲スヲアル  
 可シ然レモ第一ノ保險者ハ第八百四十五條第二項  
 ニテ與フル所ノ權能ヲ使用シテ其保險ヲ取消シ得  
 ルカ故ニ爰コテモ尙ホ第二ノ保險ノミ有効タル可

シ何トナレハ該保險ノミ確定シテ存スルヲ以テナ  
 リ○是レ即チ第八百四十四條第二項ノ論決ナリ  
 第八百四十五條ニ付テハ己ニ前條ニ於テ注意ヲ以  
 テ其一部分ヲ解説セリ○然ルニ尙ホ本條ノ各項ニ  
 付キ特別ノ注意ヲ爲サ、ル可ラス  
 第一ノ保險者尙ホ第二ノ保險者ノ如ク或ハ第二ノ  
 保險者ヨリハ多ク其意思ニアラスシテ其豫期セサ  
 ル保險ノ混雜ニ關係セサルコト付キ正當ノ利益ヲ  
 有スルモノトス是レ新保險ヲ之レニ通知セサル可  
 ラサル所以ナリ

第二ノ保險契約ニ捺印スル前ニ其ノ保險ヲ爲サシ  
 ムル旨ヲ第一ノ保險人ニ告知セサルハ第一ノ保  
 險ハ法律上當然消滅ス可シ而シテ之レカ爲メ第一  
 ノ保險人ノ權利ハ過去及ヒ未來ニ向テ毫モ減少ス  
 ルコトナシ

此ノ如キ無効ヲ以テ第一ノ保險人ノ撰擇及ヒ其意  
 思ニ委ネラレサリシコトニ付キ或ハ驚愕スル者アル  
 可シ而シテ被保人其本分ノ一ヲ缺キテ最初ノ合意  
 ヲ免カル、ハ一般ノ原則ニ反對スルカ如シ然レモ  
 其無効ヲ以テ第一ノ保險人ノ請求ニ從ハシメ又ハ

唯、其申述ニ委ヌルニ付テハ一大困難アル可シ何トナルニ第一ノ保險人其契約ヲ無効トセンコトヲ決スルニ付テハ必ス之レニ或ル期限ヲ附與スルヲ要ス而シテ此期限ハ第一ノ保險人カ第二ノ保險ヲ知了シタル可キ片ヨリ始メテ經過スルニ過キス故ニ甚ク永延ナル期限ヲ經過ス可クシテ此期限間ニハ第一ノ保險カ尙ホ生存セシヤ否ヲ知了シ得サル可ク且ツ此期限中ニハ第二ノ保險ノ有効ナルコトカ自カヲ停止セラレシモノタル可シ故ニ法律ハ結約者中ノ一方ノ意思ヲ以テ合意ヲ廢

止スルヲ得ストノ一般ノ原則ヲ用キサルヲ要ス○他又結約者中ノ一方ノ者其過失ニ因リ合意ノ執行ヲ遂ケサラシムルコト往々ニシテ之レアリ但シ其過失ニ付キ民事上ノ罰ヲ受クルハ格別ニシテ是レ茲ニ發生スヘキナリ即チ被保人ノ過失ハ自己ノ有スル第一ノ保險ノ利益ヲ失フモノニシテ乃チ自己ノ拂ヒシ保險料又ハ賦金ヲ取還スコトヲ得ス且將來拂フヘキ保險料又ハ賦金ヲ減少スルコトヲ得サルナリ而シテ此保險料ハ第一ノ保險人ノ損害ノ賠償トナルモノトス

第八百四十五條第二項ハ被保人カ新保險ヲ爲サシメントノ企ヲ有益ノ時期内ニ第一ノ保險人ニ告知スルノ義務ヲ盡セシ場合ヲ想像ス○茲ニハ法律上當然ニ契約ノ無効アラサルナリ即チ第一ノ保險人ニ附與シタル可キ最モ大ナル寬典ハ其契約ヲ保持シ又ハ取消スルノ撰擇權ヲ與ヘタルニ在リ而シテ第一ノ保險人若シ其契約ヲ保持スルルハ則チ保險ノ牴觸ノ困難ヲ恐ル、ニ及ハス此場合ニ於テハ第二ノ保險人ハ自カラ其第二ノ保險ヲ爲スニ利アルヤ否ヲ看ル可シ若シ又第一ノ保險人其保險契約ヲ

取消スルハ將來ニ付キ其既ニ受取リタル保險料又ハ賦金ノ半ハ之レヲ保持シ又將來要ス可キ保險料又ハ賦金ノ半ハ之レヲ請求ス可シ何トナレハ此保險人ヲシテ第一ノ保險ヲ取消サシムルニ至リタルハ是レ常ニ被保人ノ所爲ニ因レハナリ故ニ例ヘハ保險契約十ヶ年ト定メアルルニ既ニ五ヶ年ヲ經過シテ尙ホ其残りノ期限五ヶ年トセン而シテ六ヶ年間ノ保險料ハ既ニ拂ヒシモノナルルハ保險人ハ其受取リタル保險料ノ半額ヲ返還シ又残り四ヶ年ニ付テハ保險料ノ半ヲ請求ス可シ但シ災

害ノ場合ニ於テハ、毫モ償金ヲ拂フニ及ハサルナリ  
 ○第一ノ保險人ノ爲メ、餘リ利益アルカ如キ此結果  
 ニ付人或ハ驚愕スルコトアル可シ○然レモ定料保險  
 ヲ一ケ年以上ニ契約スルコトハ甚タ稀ナリト謂フ可  
 シ即チ概テ之レヲ毎年更新スルモノナリ然レモ双  
 方ニ於テハ唯一ケ年ニ付キ檢束セラレタルニ過キ  
 ス他又若シ一層永延ノ時期ニ付キ保險ヲ約シタリ  
 トモハ是レ其保險人ニ於テハ保險ノ永延ナルヲ重  
 シタレハナリ然ラハ則チ被保人ハ尙ホ其殘リノ時  
 期ニ付キ損失ヲ爲スニ非サレハ其契約ヲ解クヲ得

キルハ至當ノコトナリ  
 之レニ反シテ相互ノ保險ニ關シテハ充分永久ノ時  
 期ニ付キ結約スルコトアル可ク乃チ十ケ年ノ期限ハ  
 決シテ非常ナルコト非ラス○前述五ケ年ヲ經過セシ  
 設例ニ於テ保險契約ヲ失フタル被保人ハ尙ホ殘リ  
 五ケ年間ハ引續テ毎年ノ賦金ノ半額ヲ拂フ可シ○  
 茲ニ償金ハ確定シタルニ非スシテ被保人ヲ妨害ス  
 ル災害ノ輕重如何ニ關ス可シ而シテ自己ノ過失ニ  
 テ組合ヨリ脱シタル被保人ハ保險ノ利潤ニ與カル  
 コトナリ尙ホ保險料ハ半額ニ付キ損失ヲ蒙ル可シ

右半額ノ損失ヲ以テ甚々多額ナリト認定スルキハ  
之レヲ三分ノ一若シクハ四分ノ一ニ減少スルモ可  
ナリ

法律ハ本條ノ末項ニ於テ同時ニ二箇ノ保險ヲ爲サ  
シメ即チ同一ノ日附アル場合ヲ豫定ス○此場合ニ  
於テハ其二箇中何レカ第一ニシテ何レカ第二ナリ  
ト云フコト難ケレハ法律ハ被保人ニ於テ未タ何等ノ  
捺印ヲモ爲ササル前ニ二箇ノ申述ヲ爲スコト希望  
セリ○故ニ若シ被保人ニ於テ此手續キテ缺キ即チ  
申述ヲ爲サル、前ニ二箇ノ證書ニ捺印シ又ハ保險

人兩名ノ捺印アル二箇ノ證書ヲ受取リ(保險料ノ請  
取書ヲ添ヘ)タル片ハ被保人ハ毫モ保險契約ヲ爲サ  
シメタルニ非ス即チ被保人ハ本條第二項ノ適用ニ  
因リ二箇ノ保險ヨリ生スル利益ヲ獲ルノ權ヲ失フ  
モノトス○此ノ如キ決定ハ嚴ナリト雖モ是レ前述  
ノ理由ノ命スルモノニシテ是又法律ヲ遵守スル以  
上ハ容易ニ避クルコトヲ得ルナリ○若シ又最初被保  
人ハ二箇ノ保險中乙ナル保險契約ヲ申述セスシテ  
甲ナル契約ヲ結ヒタル片ハ乙保險ノ捺印ノ時ニ方  
リ第二ノ保險ヲ契約セント欲スル被保人ノ地位ニ



在ル者ナレハ第八百四十四條(第八百四十五條)第一項ノ適用ヲ受クルモノナリ

第八百四十六條 同性質ノ危険ニ對シ同一物ニ付キ漸次數名ノ保險人ヲシテ爲サシメタル有効ノ保險契約數箇アルキハ次後ノ保險人ハ先前ノ保險ヲ以テ既ニ確保シタル價額ニ付キ其先前保險人ノ資力擔保者ノ身分ニテ之レニ關涉シタルニ過キサレモノト看做シ其價額殘餘ノモノニ付キ通常ノ保險人ト看做ス可シ  
若シ又數箇ノ保險契約ヲ同日ニ約シタルキハ其保

險人ハ各自ノ約シタル保險金ニ割合シテ危険ノ賠償ヲ負擔ス可キモノトス

註解

第八百四十六條 是ニ至リ法律ハ被保者ニ重告知ノ條件ヲ遵守シテ數人ノ保險者ノ承諾ヲ得シ場合ヲ規定ス可シ  
斯ニニツノ場合アリ第一數多ノ保險契約殊別ナル日付ニテ連續シタルモノナル時第二數多ノ保險契約同一ナル日付ナル時  
第一ノ場合 若シ被保者其物件ノ眞價ヨリ多分ノ

償金ヲ受取ルコトヲ得サル以上ハ第一保險者ノ意思ヲ以テ第一ノ保險ヲ維持シタルモノナレハ其約定シタル偶然ノ償金ヲ擔當スルノ義務アリトス而シテ第二ノ保險契約ニ效果ヲ與ヘサルヲ得サルニ依リ第一保險ノ擔保保證ト爲シ效果ヲ生ス可シ此ノ如キ場合ニ臨ミ被保者ノ目ニ於テ第一保險者ノ資力ニ疑義ナシト思ハ、唯、其身巨額ニ過キタル保險料ヲ約諾セサルニ如カス○佛國ニ於テハ此保險參同ニ付テ第一ノ場合ハ保險契約ニテ規定スルヲ通常トセス且ツ法律ノ闕遺ニ依リ司法上種々ナル

判決ヲ生セリ○斯ノ如ク他ノ保險ヲ保證スルノ目的ナル保險契約ハ判決中之テ保險復効ト稱ス○第二保險者ハ危險ノ生シタル場合ニ於テ第一保險者ノ地位ヲ占取シ償金ヲ仕拂ヒ代位ノ權ニ因リ被保者一切ノ權利ヲ執行スルヲ得○然レハ第一ノ保險者ハ資力アル保險者ノ約ナルモ物件ノ全價額ニ相當セサルコトアル可キヲ以テ第二ノ保險ハ全價ノ補足額ニ付キ單純ナル保險ノ效能ヲ生ス可シ

第二ノ場合 數多ノ保險契約ノ日付同一ナルハ甲契約ヲ以テ乙契約ノ保證ト看做スノ理由ナシ○

義務ノ性質トシテハ兩契約共ニ同一ナル效果ヲ生  
 ス即チ各保險人ハ償金ノ辨濟ヲ分擔ス可キノ謂ナ  
 リ唯其義務ノ高ニ付差別アル可キノミ然ルニ保險  
 者ノ中一人ハ他ノ一人ヨリ多額ナル價ニ付キ保險  
 ヲ爲セシコアルヲ得可シ此場合ニ於テハ兩保險者  
 ノ物件ヲ保險セシ價額ニ比例シ各償金全額ノ辨濟  
 ヲ分擔ス可シ○例ヘハ爰ニ實價一萬圓ノ家屋アリ  
 甲者ニ六千圓ノ爲メ保險セシメ乙者ニ四千圓ノ爲  
 メ保險セシメタリトセン○即チ火災ノ爲メ全家焼  
 失シタルハ甲乙ノ保險者各其約束ノ金額ヲ仕拂

ヒ其合額ハ即チ一萬圓ノ償金ト爲ル可シ然ルニ若  
 シ家屋ノ一部分焼失シタルニ於テハ甲保險者ハ損  
 失ノ十分六乙保險者ハ其十分ノ四ヲ辨償ス可シ何  
 トナレハ甲者ハ家屋全額ノ十分六乙者ハ其十分ノ  
 四ヲ保險シタルヲ以テナリ○若シ又各保險者家屋  
 ノ全價ノ保險即チ甲乙共ニ家屋實價ノ二重保險ヲ  
 爲シタルハニ全家屋ノ焼失シタルハ各保險者ハ  
 損失十分ノ五即チ一萬圓ノ半額ヲ補償ス可ク又家  
 屋一部分焼失シタルハハ相當ニ評價シタル損失ノ  
 十分ノ五即チ半額ヲ補償ス可キナリ

第八百四十七條 前條々ノ規則ハ保險人其自カラ冒  
 ス危險ノ全部又ハ一部ニ對シ他ノ保險人ヲシテ其  
 保險シタル物件ヲ更ニ保險セシムルヲ妨ケス  
 此場合ニ於テハ二箇ノ保險契約互ニ獨立ノモノト  
 ス但シ第二保險人ノ約シタル賠償額ヲ第一保險人  
 ノ約シタル賠償額ヨリ超過セシムルヲ得ス

註解

第八百四十七條 佛國ニ於テハ被保者ニ於テ爲サシ  
 メタルニアラヌシテ第一保險者ニ於テ爲サシメ其  
 目的災害又ハ第一保險者ノ無資力ニ對シテ被保者

ヲ擔保スルニアラヌシテ其保險セシ災害ノ結果ニ  
 對シテ第一保險者ヲ擔保スルニ在ル新保險ニ複保  
 險ノ名ヲ附シタリ○故ニ第一保險者一家屋ヲ一万  
 圓ノ爲メニ保險シタルニ是ノ如キ重負擔ニ任スル  
 ヲ欲セサルモノトセンカ該保險者ハ更ラニ他ノ保  
 險者ト約シ別ニ保險料ヲ拂フテ之レニ其危險ノ一  
 部又ハ全部ヲ轉移スルヲ得可シ○即チ災害ノ生  
 シタル場合ニハ第一保險者ハ其被保者ニ償金ヲ拂  
 ヒ複保險者ヲシテ約定ノ償金ヲ已レニ拂ハシムル  
 モノトス

法律ハ注意以テ右二個ノ保險カ例ヘハ保險料ニ差異アルカ如ク其條件上關係ナキコト爰ニ明言セリ又此場合ニ於テハ被保者ニ何等ノ通知ヲ爲ス及ハス又被保者ヨリモ何等ノ通知ヲモ爲スニ及ハスト雖モ第一保險者ヨリ第二保險者ニ約定スル償金ハ其自ラ第一保險ニ於テ約シタル金額ヲ超過スルヲ得ス是レ他ナシ該保險者ノ利益ハ此限界内ニ止マルヲ以テナリ○然レモ又其償金ハ前ヨリ少額ナルヲ得ヘシ

第八百四十八條 保險人責任ノ原由中合意ヲ以テ明

瞭ニ除去シアルモノ、外尚ホ保險人ハ如何ナル明約アルニ拘ハラズ左ノ件々ニ原由シタル災害ノ責メニ任セサルモノトス

第一 被保人若クハ被保人ノ擔當ス可キ人ノ所爲ニ原由セシキ但シ其所爲ハ合意、法律又ハ警察規則ヲ以テ禁制シアルモノナルカ若クハ其所爲ノ服従ス可キ條件及ヒ用心手段ヲ守ラザリシキニ限ル可シ

第二 右同人ノ所爲ニシテ假ヒ禁制シアラサルモノト雖モ其性質ニ因リ若クハ其所爲ヲ果シ

タルキノ事情ニ因リ(保險ノ主眼タル)災害ヲ引  
起ス可キハ判明ナルモノニ原由セシキ

## 註解

第八百四十八條 原則ニ從ヘハ保險者ハ其約束償金  
ノ限額内ニテ其負擔タル災害ヨリ生モシ損害ノ補  
償ヲ爲ス可キモノニシテ此場合ニ於テハ別ニ其豫  
定シ置キタル原由ノ如何ヲ問フニ及ハス○去リ迎  
又此事ヲ法律ニ明記スルノ必要ナキカ如シ之レニ  
反シテ例外ノ場合ニ至リテハ法律上其原由ヲ明記  
セサル可ラス

即チ其第一ノモノハ合意上ヨリ來リタル例外ノ原  
由ニシテ例ヘハ火災ニ對スル保險ニ於テ石腦油及  
ヒ其他ノ鑛物油ノ使用又ハ瓦斯管ノ破裂ヨリ生ス  
ル火災ヲ取り除クアルカ如キ是レナリ  
陸上保險ニ關スル法律ナキカ爲メ右火災保險ニ關  
スル法律上ノ例外ナキ佛國ニ於テハ其合意ヨリ生  
スル例外最モ多シ○然ルニ右ノ例外タル極メテ當  
然ニシテ極メテ正當ノモノナルカ故ニ日本ニ於テ  
ハ其大半ヲ法律中ニ記載シ置ク可シ是ノ如クスレ  
ハ則チ合意ヨリ生スル例外ハ極メテ僅少ト爲ル可

ケレハナリ

即チ此第一種ノ例外ニハ只、意外ノ變災又ハ抗拒ス  
可ラサルカヨリ生スル原由ニ限リテ包含スルモノ  
トス

又屢、合意又ハ法律ハ其害惡アリ危険アリトスル若  
干ノ所爲ヲ禁シ而シテ只該所爲ヲ完充シタルノヨ  
ノ事實カ被保者ニ其損害ニ於ケル償金ノ權利ヲ剝  
奪スルコトアリ又他ノ所爲ニシテ左程危険ナラサル  
モノニ付テハ別ニ禁制セサルモ特別ナル條件又ハ  
其危険ヲ減シ又ハ之レヲ除ク可キ注意ノ約款ヲ定

メ置クコトアル可ク而シテ若シ被保者此條件又ハ約  
款ヲ守ラサルハ其償金受收ノ權ヲ失フハ正當ノ  
コトタル可シ

右ノコトタル時トシテハ約束上或ル所爲ノ禁制ヲ明  
言セシハ其所爲ニ付テノ完全ナル禁制ニアラスシ  
テ只火災ヲ豫防ス可キ限度、條件又ハ注意ノ約款ヲ  
ルニ過キサルコトアリ故ニ若シ被保者之レヲ守ラス  
シテ爲メニ火災ノ生シタルハ被保者ハ其禁制ノ  
所爲ヲ行ヒタルモノト等シク償金受收ノ權利ヲ失  
ス可キナリ

蓋シ佛國ニ於テハ保險者被保者(又ハ其責任ヲ負フ可キ人)ノ不注意ヨリ起リタル火災ノ損害ヲ補償ス可キモノナルヤ否ヤノ點ニ付テ大ヒニ疑ヒアル所ニシテ學者中或ハ縱令ヒ明約アルノ場合ト雖モ被保者其過失ノ責任ヲ免ル、ト能ハスト主張スル者アリ或ハ又〔重過失〕ト稱スルモノニシテ屢、惡意ト同視セラレ、重大ノ過失ニ限リテ此嚴制ヲ適用セントスル者アリ○然レモ右ニ關シテ最モ困難トスル所ハ重過失ト〔輕過失〕ト稱スル單純ナル過失トノ限界ヲ定ムルニ在リ

次ニ若シ火災ニ對スル保險ニ於ケル通常ノ目的ニ基キテ論センカ固ヨリ被保者ハ其日常ノ不注意ヨリ生スルモノト意外ノ變災又ハ抗拒ス可ラサル力ヨリ生スルモノト問ハス總テ危險ノ損害ヲ免ル、ト希望スルモノト認知セサル可ラス  
 若シ又普通ノ規則ニ從ヒ保險者ハ被保者又ハ其召使人ノ過失ヨリ生シタル災害ノ補償ヲ負擔セサルモノトスルハ其直チニ償金ヲ拂フハ只天火及ヒ比隣ヨリ起リテ爲メニ類燒シタル火災ノ限ニ限ル可ク其他ノ場合ニ於テハ火災ノアル毎ニ被保者、其



召使人又ハ共同居ノ親戚ニ於テ醸ス可キ過失ニ付テハ常ニ訴訟ノ絶ユルヲナカル可シ即チ若シ火災暖爐又ハ暖室竈ヨリ發シタルモノナルハ其使用セシ燃質物ノ分量過度ナラサリシカ、炎燒シタル木炭又ハ煤炭ノ床板上ニ散飛スルヲ防クカ爲メノ鐵製又ハ銅製ノ火受臺或ハ又火炎ノ所々ニ飛散スルヲ防ク爲メノ鐵網ヲ設置シアリタルヤ否ヤノ一ニ付キ訴訟ノ起ルヲアル可ク又充分ニ烟筒ヲ掃除シ煤即チ最モ燃燒シ易キ物質ヲ取除キアリタルヤ否ヤノ一ヲモ争フチ得可ケレハナリ

即チ是等ノ困難ニ臨ミテハ先ツ普通法中ヨリ過失査定ノ元素ヲ採集シ(第一項)次テ事實ノ元素即チ其時ノ事情ヨリ生スル一ノ元素ヲ附加ス可シ(第二項)蓋シ實際ニ於テ被保者ニ負擔セシムルハ重過失ニ限ルモノニシテ之レヲ査定スル爲メ争フ可ラサル二個ノ元素ヲ附與セリ

第一 被保者法律又ハ取締規則ノ禁シタル所行ヲ爲シ爲メニ火災ノ起リタルカ如キ片ハ被保者ニ於テ償金ヲ受收スルヲ得ス例へハ石油條例ヲ犯シ火留石油ヲ用キス通常ノ石油ヲ使用シタルカ爲メ關

火ノ破烈ヲ來シ爲メニ火災ノ生シタル如キ或ハ又  
 石油商ニシテ其營業規則上認可シタルヨリ多量ノ  
 石油ヲ店頭ニ置キ爲メニ火災ノ原由ト爲リタルカ  
 如キ即チ是ナリ  
 又其果シタル所爲ハ禁制シアラサルモノト雖モ保  
 險契約ヲ以テ之レヲ設定スルヲ得可キヲ余輩ヲ  
 既ニ想像シタル如ク尙ホ火災ノ危険ヲ豫防ス可キ  
 條件又ハ限度ニ服從セシメアルヲ想像スルヲ得  
 可シ故ニ被保人ハ入浴店ノ主ニシテ其竈ヲ警察規  
 則ニ適合シテ建設シアラストセシカ

此場合及ヒ其他之レニ類スル數多ノ場合ニ於テハ  
 被保人ノ過失重大ナルヲ明瞭ナリトス茲ニ又双方  
 互ニ中立ツル事實ノ真正如何ニ付キ爭論ノ生スル  
 一アル可クシテ火災ハ最モ屢次之レカ證據ノ有形  
 原素ヲ消滅セシムルモノナル可シ是レ双方ノ中何  
 レニ供證ノ任アルヤヲ論ス可キ機會ナリ保險人ヨ  
 リ被保人ニ過失アリタルヲ證明ス可キモノナル  
 ヤ將タ被保人自カラ法律規則ニ適合シタルヲ證  
 明ス可キモノナルヤ如何  
 一般ノ規則ハ供證ノ任ヲ原告人ニ歸スルモノトス

然ルルハ茲ニ於ケル原告人ハ火災ノ賠償ヲ請求スル  
 被保人ナリ故ニ自カラ過失アラサリシト若クハ  
 火災ノ原由天災又ハ抗拒ス可ラサルカニ在リタル  
 トヲ證明セサル可ラス  
 然レモ此ニ又錯誤ハ推測セラレストイヘル原則アリ  
 然レハ被保人ノ錯誤ヲ證スルハ保險人ニアル可  
 レ但シ反對ノ證據アルノ外ハ火災カ住居人ノ錯誤  
 ヨリ起リタリト看做サル、トハ家屋賃借人ト賃貸  
 人ト又ハ入額所得者ト虛有權者トノ關係ニ止マル  
 モノトス

要スルニ往々是レアルカ如ク各契約者ハ各自ノ利  
 益ニ於テ各々供シ得可キ總テノ證據物ヲ事實ノ裁  
 判官ニ提供スルトヨカメサル可ラス而シテ被保人  
 若シ單ニ推測カ自己ノ爲メ利益アル點ニ安シテ其  
 推測ヲ總テ鞏固ナラシメ得ル所ノモノヲ以テ之レ  
 ナ強剛ナラシムルトヲ怠タルニ於テハ被保人ハ不  
 注意ナリトイフ可シ故ニ被保人若シ石腦油ニ因テ  
 火災ヲ來タシタルハ被保人ハ寧ロ火止石油ヲ使  
 用シタリト推測ス可キナリ而シテ被保人若シ其石  
 油ヲ或商人ニ買ヒタル旨ヲ證スルヲ得ルニ於テハ

其證據ヲ提供スルコトヲ怠タル可カラス又被保人若シ入浴店ノ主タル時ニハ其竈ノ規則ニ適シテアリタル狀景ヲ知リタル隣人又ハ得意客ヲ證人トナシ其隙スル所ヲ聽カシメテ然ル可シ  
 若シ被保人カ豫防ニ屬從シタル所爲ニアラスシテ全ク禁止シタル所爲ヲ行ヒタル乎ヲ知ルコトニ係リテハ被保人ハ其所爲ヲ行ハサリシトノ推測即チ被保人ニ過失アラサリシトノ推測ハ尙ホ一層顯然適用ス可キモノナルコトハ尙ホ其反對ノ證據ノ被保人ノ爲メニ一層容易ナルニ異ナラス故ニ被保人ハ已

レノ家屋ノ在ル場所ニヨリテ藁屋根若クハ板屋根ヲ有スルヲ得ス被保人ハ警察規則ニ從ヒ瓦屋根若クハ金屬屋根ヲ有シタリト推測ス可キハ勿論ナリ而シテ事實ハ容易ニ隣人ノ知ル所ナルカ故ニ被保人カ禁止セラレタル屋根ヲ有シタリトノ證據ハ之ヲ提供スルコト容易ナル可シ(此他ニ事例ヲ枚舉スルハ無益ナル可シ)  
 保險人ノ爲メニ責任ヲ生セサル可キ被保人ノ過失ニ關スル第二ノ場合ハ同一ナル精確ヲ有セス餘儀ナク裁判所ノ査定ニ附スル所多シ何トナレハ法律